

# 日中青年の友情計画

1988

国際協力事業団  
研修事業部

Y





# 日中青年の友情計画

JICA LIBRARY



1073698[1]

19068

1988

青業

JR

89-7

国際協力事業団

19068

## 序

昭和61年11月、中曽根総理大臣によって提唱されました「日中青年の友情計画」は、翌62年9月、100名の青年の受け入れとともに発足し、今年度は11月中旬に都市経済青年、農村経済青年、教員、青年指導者の4グループ総数100名が李克強総団長に率いられ、来日されました。李総団長は日本側関係要人多数を訪問されて先に帰国されましたが、4グループのメンバーは1ヵ月にわたり日本国内を視察され、関係者との交流を深められました。

各グループのメンバーはいずれも各界の中堅指導者であり、日本側のカウンターパートには真剣な質問が数多く発せられ、双方実り多い学習になったと聞いております。

ここにとりまとめました報告書は、中国青年の代表的感想文および日本側の合宿青年の声とホームステイ家庭の印象記を中心に作成したものです。中国青年の1ヵ月にわたる滞日中のさまざまな場面に参加された方々の思い出のしるしとなり、また、日中両国の参加者の体験と感想がより多くの方々に共有される契機となれば幸いです。

なお、この報告書は中国語版を併せ作成し、参加青年の皆様にお送りいたします。

終わりに、本計画に温かいご理解とご協力を惜しまなかつた関係者の皆様に心から御礼申し上げます。来年度以降、ますます有意義なプログラムにしていきたいと考えておりますので、引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成元年3月

国際協力事業団  
研修事業部  
部長 御手洗 章弘



# 信頼と友情への第一歩

昭和63年度日中青年の友情計画



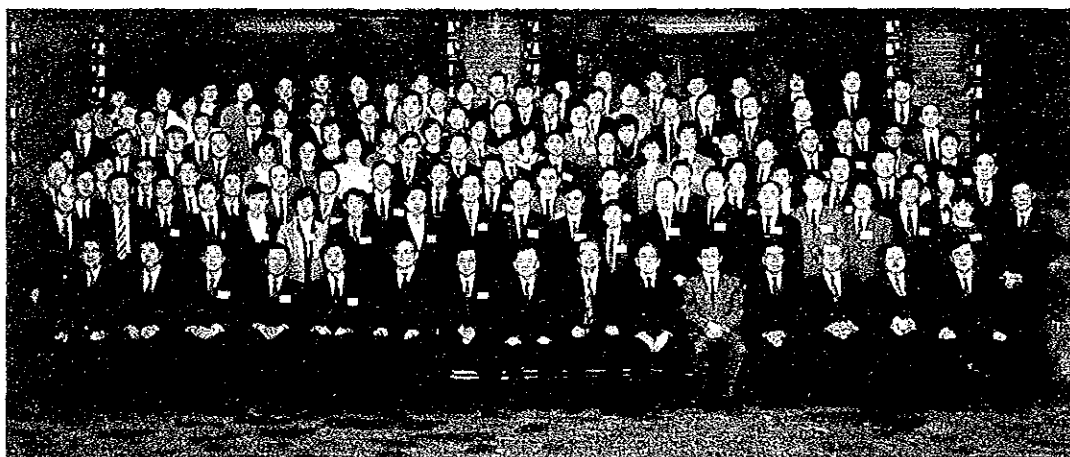
▲ 歓迎の挨拶をする竹下総理大臣

## 竹下総理大臣表敬

11月11日 中国青年100名は、首相官邸に竹下総理大臣を表敬訪問した。



▲ 李克強総団長から竹下総理大臣に記念品の贈呈



▲ 竹下総理大臣とともに記念撮影

会 迎 歓



▲ 歓迎の挨拶をする国際協力事業団岸副総裁



▲ 揚振亜駐日中国大使(右から2人目)を囲んで



▲ 李克強総団長の挨拶



▲ セレモニーの後の歓談

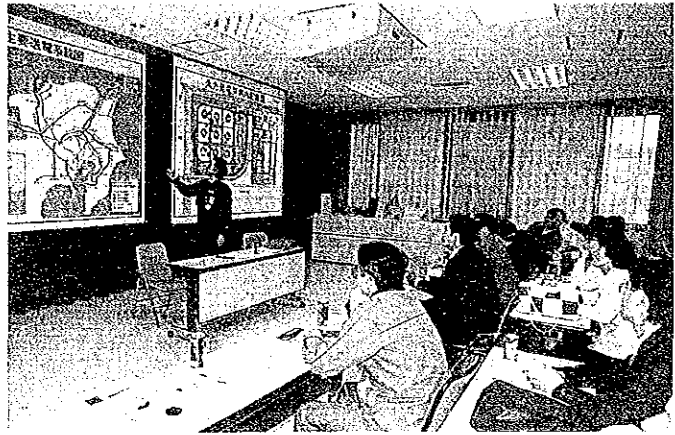




▲日本語会話の学習

## 共通プログラム

1週間にわたって日本の文化、歴史、経済などに関するオリエンテーションを受けた。



▲火力発電所の概要説明を受ける



▲先端技術の展示を見学



▲日本武道館大道場にて武道鑑賞、演武者とともに記念撮影

## 都内分野別プログラム

共通プログラムに続いては、4つのグループ（都市経済青年、農村経済青年、教員、青年指導者）に分かれて、都内の各所を見学した。



▲ 青果市場にて



▲ 高校の概要説明を受ける



書道(右)、生物(上)の授業を参観 ▲ ▶

# 合宿セミナー

日本の青年と合宿し、討論、スポーツ、ゲームを楽しんだ。



▲ 基調講演を聞く中国青年



▲ 分科会での討論



▲ 交歓会でゲームに興じる



▲ スキーに挑戦

## 地方分野別プログラム

4つのグループは各受け入れ県を訪問。それぞれの県で、特色あるプログラムに参加した。



▲火力発電所のコントロール室にて



▲「お茶」を楽しむ



▲あい染を体験



▲農業大で学生といっしょに仕食



▲ジュース工場にて出荷作業を見学



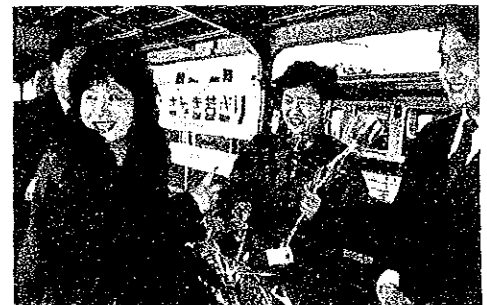
▲みかん農園経営者との意見交換会



▲農業大学校にて



▲ホストファミリーとの対面



▲別れ、駅でホストファミリーが見送る

# 会 送 歡



▲挨拶する国際協力事業団  
岸副総裁



▲謝辞をのべる李剛副総団長



▲セレモニーが終わりともに食事をする



▲岸副総裁より李剛副総団長に記念のアルバムが手渡された



▲中国青年による余興



▲余興を楽しむ



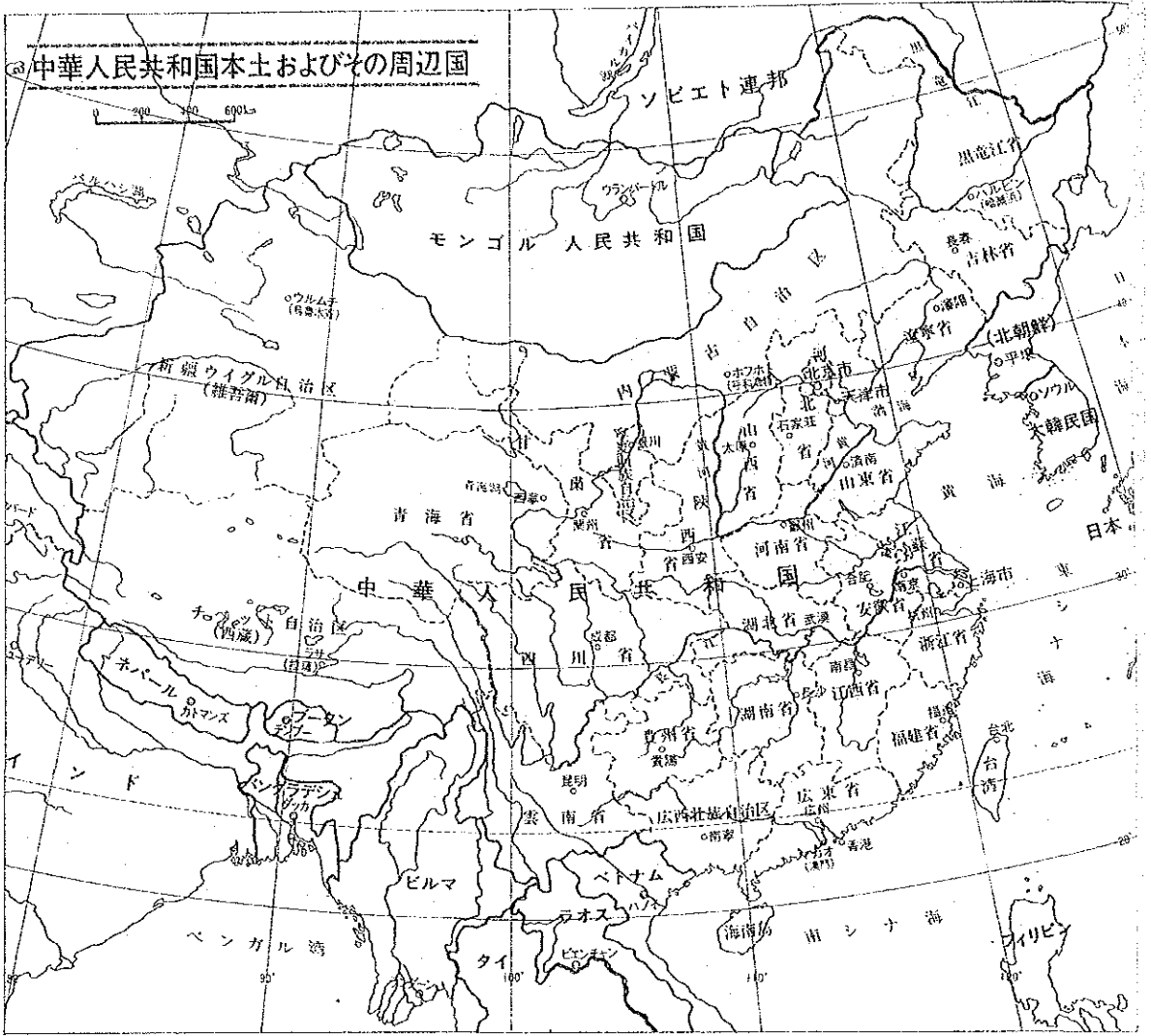
▲乾杯、そしてさようなら

# 目 次

## 序

1. 日中青年の友情計画	
(1) 事業の概要 .....	3
(2) 実施協力団体と実施県 .....	5
2. 招へい青年の印象 .....	7
3. 合宿セミナー参加日本青年の声 .....	20
4. ホストファミリーの思い出 .....	25
〈実績資料〉	
1. 国内実施日程 .....	30
2. 中国青年名簿 .....	35
3. 日中青年の友情計画実績一覧 .....	45
4. 昭和63年度青年招へい事業受け入れ実績一覧 .....	46
5. 青年招へい事業実施協力団体連絡先 .....	47

中華人民共和国本土およびその周辺国





# 1. 日中青年の友情計画

## (1) 事業の概要

### 1) 事業の目的

21世紀に向けて、日本と中国との友好と協力の関係をより強固かつ実りあるものとするため、未来の国造りを担う中国の青年を我国に招へいし、日本の同世代の青年との交流を通じ、相互理解を深め、真の友情と信頼を培うことを目的とする。

### 2) 実施方法

#### ①招へい人数

昭和63年度は、100名の青年を同時期に受け入れる。

#### ②招へい対象者

下記分野における指導的立場にある18～35歳前後の青年。

(総団グループ、リーダー、サブリーダーは除く)

##### (i)総団 4名

中華全国青年連合会幹部

##### (ii)勤労青年(都市経済青年) 24名

第三次産業従事者(流通、サービス等)を含む企業管理者、工場長、国家経済政策立案者、関連公務員

##### (iii)農村青年(農村経済青年) 24名

農業政策関係者、農村企業経営者、個人農場経営者、中華全国青年連合会内の農業関係担当者、関連公務員

##### (iv)教員 24名

中・高・大学教員、学校運営関係者、校外活動(レジャー)教官、職業訓練校教師、関連公務員

##### (v)青年指導者 24名

中華全国青年連合会職員、青少年対策関係者(青少年犯罪防止等)、関連公務員

#### ③招へい期間及び時期

招へい期間は11月6日～12月6日までの1ヵ月。

### 3) プログラム概要

来日  31日間  帰国	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">共通プログラム</div>	日本の経済、文化、政策等についての概論
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">以下の分野での分野別研修プログラム ・ 勤労青年 ・ 教員 ・ 農業従事者あるいは、関係青年 ・ 青年指導者（スポーツ、文化、社会活動に関わる者）</div>	関連分野の省庁・施設等訪問  地場産業等の施設見学  日本青年との交流  ホームステイ
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">視 察 旅 行</div>	文化、社会的面から日本理解を深めることを目的とする
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">評価プログラム</div>	訪日成果を強化するため評価会を行う

### 4) 受け入れ体制

本計画を円滑に実施するため次の2委員会を設置する。

#### ①関係省庁調整連絡会議

(i) 任務：本計画の実施及び運営に係わる基本的事項につき協議。

(ii) 構成メンバー：

外務省経済協力局技術協力課

アジア局地域政策課

大臣官房文化交流部文化第二課

総務庁青少年対策本部

文部省学術国際局国際企画課教育文化交流室

農林水産省経済局国際部国際協力課

労働省労政局勤労者福祉部勤労青少年室

自治省大臣官房企画室

国際協力事業団

#### ②実行連絡調整委員会

(i) 任務：実行計画の運営、分野別プログラムの実施及び各プログラム間の連携につき協議し、プログラム実施上の問題につき、国際協力事業団に対し助言。

(ii) 構成メンバー：関係省庁より推薦された民間の実施協力団体。

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| (特)青少年育成国民会議    | (特)勤労厚生協会        |
| (特)中央青少年団体連絡協議会 | (特)ユースワーカー能力開発協会 |
| (特)世界青少年交流協会    | (特)国際交流サービス協会    |
| (特)日本国際生活体験協会   | (特)青年海外協力協会      |
| (特)全国農村青少年教育振興会 | (特)国際協力サービス・センター |
| (特)日本経済青年協議会    |                  |

## 5) 実施運営分担

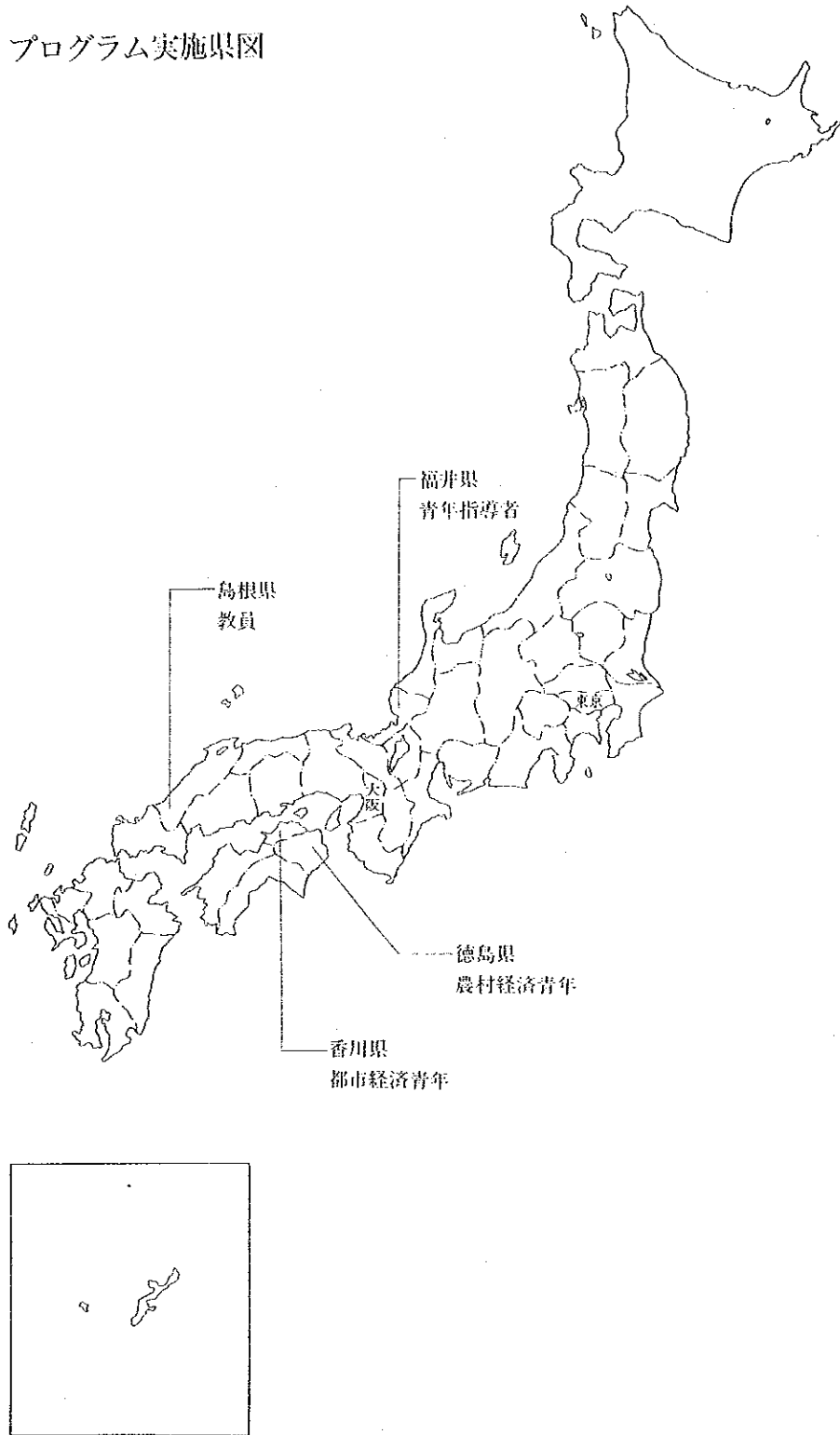
	プログラム 監 理	プログラム 実 施		食事・宿舎の 手 配
		連 絡 調 整	実 施	
共通プログラム (都 内)	国際協力事業団	国際協力事業団	国際協力サービス・センター	国際協力サービス・センター
都内分野別プログラム (都 内)		実施協力団体	実施協力団体	実施協力団体
合宿セミナープログラム (東京近郊)		実施協力団体	実施協力団体	実施協力団体
地方分野別プログラム (ホームステイを含む)		実施協力団体 (国際協力事業団 国内支部)	地方協力団体 (国際協力事業団 国内支部)	地方協力団体 (国際協力事業団 国内支部)
見学旅行 (広島、京都等)		実施協力団体	実施協力団体	実施協力団体
評価プログラム (都 内)		国際協力事業団	国際協力サービス・センター	国際協力サービス・センター

(注) 地方分野別プログラムは、地方公共団体の指導と協力を得て実施する。

## (2) 実施協力団体と実施県

分野別	人数	実施協力団体名	実施県
総 団	4	国際協力サービス・センター	—
都市経済青年	24	世界青少年交流協会	香 川
農村経済青年	24	中央青少年団体連絡協議会	徳 島
教 員	24	国際交流サービス協会	島 根
青年指導者	24	ユースワーカー能力開発協会	福 井

# プログラム実施県図



## 2. 招へい青年の印象

### 歓迎会のあいさつから



李 克強  
総団長

尊敬する岸薫夫先生、揚振  
亜先生、友人のみなさま、天  
高く、馬肥ゆる秋の季節に私

たち中国青年100名は和平の使命、研修の重任を担  
って、貴国の国土に足を踏み入れました。ここへ  
来てまもないのですが、日本人民と青年の友情、  
また関係方面の温かい気持ちをよく感じ取りまし  
た。先ほど、岸薫夫先生は、友情あふれるごあい  
さつをなさいました。私は中国青年考察団一同に  
代わって、衷心より感謝の気持ちを表し、この機  
会を借りて、日本の友好諸団体と青年たちに対す  
る中華全国青年連合会と中国青年の心からのごあ  
いさつを申し上げます。

中日平和友好条約締結10周年にあたって、貴国  
へ訪問、視察に参ったわけですが、現在の中国青  
年は中日平和友好条約締結に対してだけではなく、  
中日共同声明に対する印象は非常に深いものであ  
ります。彼らは記憶力の一番いい青少年の時期に、  
十数年の中日関係の発展をこの目で見てきました。  
中日共同声明を着実に履行し、中日平和友好条約  
の原則にのっとりながら、両国の関係はいつそう健  
全に発展し、青年交流の道もますます広がるでし  
ょう。

私たちは、先日竹下首相が中国を訪問し、中国  
の指導者と深まった会談を行い、円満な成果を得  
たことに喜びを感じ、また、両国青年の間の友好  
交流が効果的かつ内容が充実した新しい時期に入  
ったことにも喜びを感じました。先達に切り開か

れた中日友好事業を受け継ぎ、21世紀に向けてそ  
れを発展させることは自分の肩にかかる重任だと  
中国青年は切実に感じました。私たちは昨日飛行  
機で飛び越えた空はいつまでも平和と友好の雰  
囲気に包まれることを心から願っています。これは  
両国青年と人民の根本的な利益に合致するだけ  
ではなく、世界平和という歴史の流れの必要でもあ  
ります。

皆様のご存じのように、中国はいま改革、開放  
政策を推し進めています。これは歴史の発展の必  
然であり、21世紀に向けて絶え間なく進められて  
いくに違いありません。開放、改革を行うには各  
国の長所を取り入れ、有益な経験を参考にしなけ  
ればなりません。今回の来日の中国青年考察団の  
人々は貴国の青年に学び、互いに交流し、理解と  
友好を深めることを早くから決心しました。

去年、初めての中国青年考察団は成功した経験  
を得、今回の考察団の団員はまた中国の30の省、  
市、自治区と中央政府機関の各分野から選ばれた  
優れた青年代表であります。その上に日本の外務  
省、国際協力事業団および各実施協力団体の周到  
なご手配、数多い日本青年と各界の人々の温かい  
ご声援があるので、今回の訪問は去年にもまして  
より実り豊かな成果を勝ち取るに違いないと確信  
しています。

中国青年考察団の団員は、これから日本で1ヵ  
月の研修をし、生活します。1つの国を知るには  
1ヵ月は短いものですが、結ばれた友情、得た知  
識はきっと時間ではかることはできません。です  
から、1ヵ月後の歡送会では両国青年と友好人士  
がともに成功の喜びを分かち合うさまを、今から  
想像できます。中国側の代表も今日の私のあいさ





りたいへん有益な啓発も受けた。

香川県に滞在中、私たち都市経済グループは高松青年会議所の友だちと一緒に瀬戸大橋を遊覧した。案内して下さった高松青年会議所国際交流委員会副委員長、塩日出男先生は私にこうおっしゃった。「瀬戸大橋が作られてから、もっと大橋をきれいに飾るために、ネオンをつけたらどうだという人がいます。そうすると瀬戸大橋の夜景はもっときれいになり、観光客もきっと増えるでしょう。」このような経営的視点を持つ話にたいへん興味を持っているので、ついでに彼のやっている広告業について尋ねた。話し合いで彼は実際の仕事に長じるばかりではなく、社会と人生に対しても非常に情熱的で責任感がある感じがした。私たちは人生の理想から、社会的進歩、社会に対する個人の責任を語り合い、共通するところをたくさん得た。

松下政経塾の青年学生との話し合いもたいへん深い印象を残してくれた。そこの学生は政治的な抱負を持つ青年である。歓談の中で彼らは、現在の勉強生活を紹介してくれ、たくさん問題をめぐって議論しあったりした。私たちと話をしていた武正公一先生は、「私の理想は個人の個性を十分に発揮させる政治家になることです」とおっしゃった。「歴史上、それを成し遂げた人は、まだ1人もいないじゃないですか」と私は言った。武正公一先生は、「これは非常にむずかしい事業であると承知しています。しかし、このような目標を決めた以上、終生そのために努力しなければなりません」とおっしゃった。彼のおっしゃったことに共鳴を感じた。彼のこうした確固とした政治に対する情熱に私はたいへん敬服している。私たちはまた、21世紀をみざすわれわれの世代の担うべき責任にも触れた。これこそ中日両国青年が話し合うことができる原点ではないかと思う。

時間は短し、話は尽きぬ。1ヵ月の訪問はあっという間に過ぎ去ってしまった。日本青年と交流

するとき、いつも時間が短いのが残念であった。しかし、私たちの人生はまだ何十年もあり、別の形で交流を続けていくことはできる。最後に私たちは終わっていない対話を文通で続ける約束をして、別れを告げた。

## 訪日印象記



張 勇  
都市経済青年グループ

初めての訪問であるが、日本はまったく知らない他国ではなかった。中日両国は海ひとつ隔てて、文化、芸術、伝統のうで切っても切れない関係を持っていた。日本人民は戦後、経済的な奇跡を生み出したことは、世界の注目の的となった。実際の日本を見ることは長年の願望で、JAL784便に乗ったとき、その願望はさらに強くなった。

日本で一番啓発を受けたのは、理論的によく総括されている企業管理である。日本は島国で国土が狭く、人口が多い。長期に渡る大自然との闘いの中で人々は集団で耕作し、互いにいたわりあって生存してきたので、集団主義と社会の安全を強く希望するという欧米と、まったく異なる民族特性を形成した。集団主義、終身雇用、年功序列という伝統的なものは管理の基本をなしている。

実際視察の中で、これらの民族特性が日本経済の中で果たした役割を深く感じた。川崎の三菱自動車の加工現場のいたるところに、「職場管理表」「職務能率表」が掛かっていた。品質を高めるために労働者は毎月2回、品質分析を行う。これはたぶん製品が競争力を持つ要因であろう。見学した工場は品質管理が隅々まで浸透していて、日本の自動車産業は一躍して世界の最先端に立ったのも無理はない。

温情主義的家父長式の関心と激しい競争の中で



社会の安全を強く求めることによって生まれた集団力は世界のどこの企業家もうらやむことであろう。「品質管理はアメリカで生まれ、日本で完璧にされた」という言葉の意味は、今日に至って初めて理解した。日本企業における人材開発、技術開発のスピードもたいへん深い印象を与えてくれた。日本経済の勃興はその伝統的特性と近代的科学管理方法、伝統的な手工業と高度の科学技術とうまく結びつけた結晶ではないかと思う。

しかし、今日に起きている日本企業の変化も私の注目を引いた。コンピューターの普及、通信手段とハイテクの迅速な発展に伴って、社会の分業はますます細分化されている。経験だけでは今日の必要に応じることはできなくなり、若者は自分の知識と能力をよりどころに、社会の伝統的力に挑戦する。集団主義、終身雇用制、年功序列賃金制度は崩壊しつつある。世界の人々がうらやむ日本の伝統は、どういう運命を迎えるであろう。

今日、わが国も経済改革を続けている。わが国の文化と伝統は日本と共通するものが多いのである。近年来、西洋の管理思想も一部導入しているが、日本から何を参考にすべきであるか、これは今回の日本の旅の一番良い課題となるであろう。

日本でわずか1カ月だが、いたるところで日本国民の友好的な気持ちを感じ取った。ホームステイは特に忘れがたい印象を残してくれた。

日本へ来る前聞いたところでは、日本人は内向的で反省に長じ、人とつき合うときは慎重だそうである。言葉の障害もあるので、ホームステイの前は多少焦りと不安があった。ホストファミリーの三好進氏と顔を合わせたときは18日の午後だった。日本の友人の周到な手配のもとで一緒に栗林公園を散歩した。とてもリラックスした雰囲気の中で漢字に英語を交えて、相手の家庭のことをいろいろ聞いた。

夕食のあと、私たちは車で三好氏の家へ行った。三好氏一家6人、優しいお母様と書道に長じる美

しい奥様がいた。その晩、私たちはたたみの上でペンと英語を頼りに言葉を交わし、三好氏は通訳になってくれた。言葉の壁で交流できる範囲は制限されたが、知り合いたいという強い要望があるのでかなり深い心の触れ合いができた。寝床につくとき、ほのぼのとした幸せを感じた。

翌日、三好氏に伴われ、彼の2人の子供と一緒に金刀比羅宮、琴平公園と少林寺拳法連盟を見学した。

ホームステイのとき、三好氏は私たちに日本の伝統的な料理のさしみとすきやきを用意してください、楽しい雰囲気の中で1日を過ごした。翌朝、いよいよお別れの時間である。三好夫妻は徹夜して漢字で書いた手紙を持ってきて、私たちの健康と安全を祈ってくれた。夜ふかしして赤くなった目を見て、ぐっと熱いものが込み上げてきた。言葉はあまり通じなかったが、私たちの心は通い合っていた。

香川と別れて、列車は動き出した。私の目頭は熱くなり、三好夫妻がホームで手を振っている様子は深く脳裏に焼きついた。私を感激させたのは三好一家だけではない。また、私たちのコーディネーターをする山本様と西忠雄様がいる。彼らを通して、日本の人々の友好的な気持ちは、私の心に深く刻まれた「来年、北京で再会しよう」という三好夫妻との約束を思い出させた。中日の友情はとこしえに。



## 訪日印象



党 永平  
農村経済青年グループ

初めての訪日であるから、すべて新鮮さを感じる。しかし、一番印象深いのは、やはり、日本のハイレベルの物質文明と高度に発達した工業生産力である。







やらねばならないことだと思う。

別れのときがやってきた。窓外には秋風が吹いていたが、部屋の中は熱い空気がみなぎっていた。

「昂」の曲にのって、数十ものペンライトが揺れた。まさしく「昂」と蛍の光がともに舞い飛び、歌声と笑い声が明るく響く光景であった。

お互いに「サヨナラ」と声をかけ合ったとき、日本の友人が、合宿という形式で交流を計画してくれたことに、私は心から感謝した。なぜなら、真に両国の青年たちが「人と人の、心と心の」交流を通してこそ互いに知り合うことができ、共に中日友好関係を発展させるという重責を担っていると思うからだ。

1988年12月3日 於東京

まるでわが家に帰ったごとく



李 鳳琴  
教員グループ

もう土井久之先生とお別れしなければならない。「さようなら」という言葉は、2日間のホームステイが終わったことを意味している。でも私はまだ語りつくせぬ話が残っているようだった。土井先生もそうだったと思う。2日間の時間はあまりにも短かった。

私たちは初対面ではあったが、あたかも何年来の古き良き友のように、孔子や孟子の道から、東西文化の交流に至るまで、富士山からチョモランマ峰に至るまで、中日人民の歴史的な友好往来から将来の世々代々に至る友好についてまでを、互いに語り合った。

日本を訪問する前まで、私は日本人は中国人に対し、深い偏見を持っているのではないかと心配していたが、土井先生とのおつき合いでは、みじんもそういうことを感じなかった。

先生のお言葉、先生の人となりや私たちに対す

る手厚いもてなしは、私にはまるでわが家にいるような心地であった。

私はけっしてこの地——島根県石見町を忘れないであろう。

私はけっしてここの方たち——土井久之先生やご家族を忘れないであろう。

相模湖の印象



安 七  
教員グループ

山の景色の美しさゆえか、それとも水の美しさゆえか、相模湖はほんとに人をひきつける。青い山々と静かな湖水、それに山の中腹に点在する灯は、人々を詩や絵画の世界にいざなってくれる。

街の騒音は消え、ここに静かな世界を見いだした。私はふと陶淵明の「結廬在人境、而無車馬声」（人境に廬を結び、しかし車馬の声無し）という俗世を離れた桃源境（ユートピア）に来たかのようでもあり、またあたかも私のふるさと——中国・チベットの南の谷間に帰ってきたかのようだった。月光に心まどい、宵闇に気持ちが包まれていく。

この地で、私たちは幸いにも20数名の日本の青年と共に食卓を囲み、同宿し、膝を交えて語り合った。言葉が通じないので、手まねや筆談をし、日本語や英語の単語を並べて話した。

中国と日本の青年は、多くのことについて、その認識のしかたに差異はあったが、1つだけ共通点があることを私は発見した。それは双方とも相手のことを理解したいということであった。

早くも隋や唐の時代に、木の船で海を渡っていたころから、両国の交流は密接に行われており、理解も深かったのだから、近代的交通手段を有する今日、中日の青年がお互いのことについての知識がないということは、これ以上に残念なことは

ないだろう。

2日間の交流は短かったが、しかし、心に残る印象は深いものがあった。

歴史は21世紀に向かって突き進んでおり、21世紀は青年たちのものである。21世紀になったらどう変わっているだろうか？

私たち青年は、多くのことをやらねばならないだろう。皆には多くのやるべきことがあるだろうと思う。



## 日本国視察を終えて



劉 興強  
青年指導者グループ

1988年11月6日、中国青年視察団の100名の団員は「日中青年の友情計画」に基づいて

日本の国土に足を踏み入れ、1ヵ月の研修と視察がここに始まった。幸いにも私は団員の1人として日本の青年と幅広い触れ合いと交流を繰り返すことができた。日本視察の期間は長いとは言えず、日本の青年と交流を深める時間も限られていたが、中国と日本の青年の友好交流は、十分に意義あるものだと心から感じた。

1 中日青年の友好往来は特に恵まれた条件を備えており、中日青年の交流を深めることは両国の青年の共通の願いである。日本視察中、私たち青年指導者グループの全団員は長野の奥志賀スポーツハイムにて日本の青年と3日間の合宿生活を送り、その後福井県で記念すべき2日間のホームステイを体験した。

奥志賀スポーツハイムでの合宿期間中、私と同室になったのは吉田さんと北園さんだった。吉田さんの奥さんは広州へ旅行に行ってきたばかりで、中国には興味津々なのだそうである。北園さんの奥さんは出産を間近に控えていた。彼は、奥さん

が十分なケアを必要とする状況にあるにもかかわらず、中国青年との交流のチャンスを逃すまいとして、東京から遠く離れた奥志賀へやって来たのである。

会話ハンドブックや文字の力を借りても意思を伝えるのがむずかしいと感じることがあったが、身振り手振りや視線、表情でお互いの心を通じ合わせ、厚い友情を結ぶことができた。私たちが奥志賀を離れ、日本の青年たちといよいよお別れというときに、たくさんの青年たちが別れを惜しみ、目に涙をためていた。

福井県でのホームステイのときは、私の民泊家庭のあった福井県上中町に、ちょうど中国から帰ってきたばかりの青年たちがいて、中国から何冊もの分厚いアルバムを持ち帰り、町の連合青年団活動のときに生き生きとしたお土産話をたくさん聞かせてくれた。彼らは、ホームステイの2日間は2晩とも私たちと夜中の2時、3時まで話し込んでくれた。このような触れ合いや交流を通して、日本の青年たちの、もっともっと中国を知りたいというまじめな気持ちを感じることができた。このような中日青年の時空を超えた思いは、中日両国の永い友好の揺るぎない証とならなければならないと思う。

2 世界の安定と平和を守ることは、中日青年の共通の願いであり、中日の青年は歴史を学び、教訓を身につけていく中で互いに人類の平和的發展を促すために努力していかなければならない。

日本視察中、日本の学者が日本の歴史を語る際、中国との歴史的なかわりを客観的に話していたのを聞いたことがある。また、見学・訪問のとき、日本側の発言者は日本の軍国主義者が第二次大戦中に戦争を起し、中国を侵略したことを指摘し、批判しているのを何度も聞いたことがある。私たちが福井県上中町でホームステイをしたときも、町の連合青年団の青年たちが自発的に中国青年視

察団の団員たちと中日友好・永久不再戦の誓いを立てたいと言ってきた。

そして、また、広島平和記念公園見学の際、たくさんの日本の若者たちが原爆資料館を訪れ、なかには戦争中に悲惨な死を遂げた人々を想い、涙を流す者もいた。すべて、私たちに深い印象を残したのである。平和こそ人類の最も素晴らしい事業であると私は考えている。

日本の人々、日本の若者たちは、歴史をよく知ったうえで、より強く、より切実に平和を渴望しているのである。今後、中日の青年はこれまでも増して仲良く手を携え、人類の平和という事業を守り、育てるためにより一層努力していかねばならないと思う。

3 日本は青少年教育の面においても、検討と参照に値する素晴らしい経験を積んでいる。青少年は社会の未来である。どこの国でも青少年の健全育成・教育のためには苦勞をいとわない。

日本の青少年活動に対する視察を通して、日本が青少年教育に関して積み重ねてきた経験と方法は、私たちにとって検討と参照に値するものであることを知った。

たとえば、政府に青少年活動部門を設置し、政府を青少年社会教育ネットワークの核としたり、青少年専門の司法機関を設置して、非行青少年の矯正・教育を行ったり、官民一致の方式で社会全体（家庭、学校、その他の団体）を動員して、共同で青少年の教育や保護にあたるといったことである。

日本で過ごした1ヵ月は素晴らしく、この1ヵ月によって私は日本という国、日本の人々、日本の若者たちを一層深く理解し、たくさんの友だちを作った。帰国後は、日本で感じたことを私の周りの若者たちに話し、中国と日本の青年たちの友情を更に深めるために努力していきたいと思う。

## 日本の印象と感想



宋 勇  
青年指導者グループ

もともと、日本視察中に日本経済の発展要因を探ってみたいと思っていたのだが、視察の時間が短すぎて、このような大仕事はどのようにこなしようがなかった。ここに記録するのは訪日時の印象と感想であるが、あるいは視察の初志とも接点があるかも知れない。

1 危機感が国民全体に及んでいる。日本民族は経済先進国としての誇りを持っているが、それ以上に危機意識をもっている。教授の講義であろうと、人々とのたわいない雑談であろうと、日本経済の発展条件の優と劣、現存する経済制度の利益と弊害を分析するとき、日本人の多くは後者を語りたがる。

たとえば、日本の国土が狭く資源に乏しいこと、人口が大都市に過度に集中していること、高齢化が社会にもたらすさまざまな問題、青少年犯罪が戦後3回目のピークに達していることなどである。彼らの話には不安と焦りが奥深く秘められており、それが私にとって印象深かった。

日本では戦後国民に対して常にこのような教育を行い、危機感を全国民の意識に仕立て上げたそうである。日本はけっしてこれを経験として総括してはいないが、やはりこれが日本経済の発展とある程度関係していると私は考える。あるいはこのような危機意識があったからこそ日本人の頑張り精神を呼びさまし、そして高度経済成長をもたらしたのかもしれない。

ここからもわかるように、危機感を持たない民族は、覚醒した健全な理知を持つ民族とは言えず、当然頑張り精神を持つ民族でもなく、経済発展に際しても発展のための真の原動力や指導力を持ち

えないのである。

2 発展途上にある民族文化——ある日本の教授が「日本の文化」について講義をしているとき、中国の団員が日本の文化の特徴とは何かと質問し、教授はとっさに答えを出すことができなかった。そのあと教授はひとしきり考えたあとで、こう答えた。「日本は進んでいる文化であれば何でも学ぶのである。百年前には主に中国の文化を学び、その後は主にアメリカの文化を学んできた」。このような回答に興味を持たない者もあるかも知れないが、私はこの回答も日本文化の特徴を正しくとらえているものの1つだと思う。

日本人は模倣を得意とする民族だと言う人がいるが、これにも一理あると思う。それも、悪い意味にとってはならないと思う。模倣とは高次元の学習であり、創造のための高次元のスタートラインであり、それは当然高い起点からのジャンプであることを知らねばならない。これは、既に日本経済の発展により証明されているところである。

3 開放の中に活路を見いだす——日本経済の発展は開放から始まった。鎖国時代、日本の経済発展は世界に大きく遅れをとり、開国後、欧米の進んだ有益な文化や技術を学び、初めて飛躍的な経済発展を遂げたのである。日本は資源に恵まれないので、もしも世界に資源の拠り所を求めなかつたら、経済発展も米なしで炊事をするようなものとなる。

同じように、戦後、日本の経済発展は速く、深刻な生産過剰に陥ったが、もし世界に市場を求めなければ、経済危機も避けがたいものとなる。日本の開放は特殊な状況下で実現したもののだが、日本民族がこれに対して公然の認識と公正な評価を行ない得たということは熟慮に値する。これは、日本民族の開放に対する認識の深さの表れではないだろうか。

日本の経験は、閉鎖すれば滅び、開放すれば栄えるということを証明している。その理由は、世界経済の発展は大循環であり、その世界経済の大循環の中に身を置くことのできない民族の経済発展はおのずから閉鎖的、保守的、かつ遅れたものになるということにある。また、日本の経済から私たちは、早い時期に開放を遂げ、開放の度合いの大きい民族の経済は早期に急速な発展を遂げるということを教えられた。

4 現実に即した対策研究——日本視察中、私は2つのことに気づいた。

1つは日本の執政者はほとんど長期計画を制定せず、普通は自分の任期中の執政方針や計画を立てるのみであるが、それはけっして日本の社会の発展を妨げるものではない。

第2に、科学研究においては実用技術の開発を重視し、基礎科学の研究を二次的に位置づけている。日本の地方には、基礎科学研究機関はほとんどなく、かといって地域経済に役立てるような技術研究機関もない。ここからも、日本人が現実を直視し、実際に重んじる民族であることがわかる。

いかなる民族も固有のイデオロギー的色彩を持った理想を持ち、自己の社会発展の長期計画をもたなければならない。しかし、いかなる民族も理想だけを描いていたのでは生きてはいけない。理想を実現するには、まず現実から出発するのであり、理想から出発することはできない。無数の現実の目標の実現こそ、理想の実現なのである。これが日本経済の発展要因考察を通じて私が体得したものである。

以上はけっして日本の社会・経済発展について全面的に考察を加えた結果ではない。つじつまの合わない所もあるかも知れないが、視察を通じて感じたことをそのまま述べたものである。

1988年11月30日



ニッポン駆け足30日



鉄 国傑  
青年指導者グループ

初冬の日、私は中国青年視察団の一員として日本を訪れた。日本列島で過ごした1ヵ月が私に残してくれたヒントと思索はあまりにも多い。

戦後の日本は、いたるところ傷だらけとなった国家の厳しい建て直しから始まった。戦争が国の経済や国民の心に残した大きな傷跡を前に、多すぎる人口や乏しい資源を背景に、数十年の間、努力を積み重ね、だれもが目を見張るような成果を収めたのである。世界各国が日本の成功に敬服し、そしてまた日本のサクセスストーリーを追い求めることに余念がない。1ヵ月間の訪問では、「よしの髓から天井をのぞく」ようなものだが、長期的な、国をあげての国民教育体制とそれによって形作られた国民の質の高さは、日本経済の飛躍を促した大切な要因であると私は考えている。

明治以降の100年余りの間、日本政府はたゆむことなく国民教育に力を入れてきたが、長期にわたって教育を重視し、教育関係の投資にウエイトを置き、有効なマクロ政策を遂行することによって民族全体の質を大きく引き上げ、日本国民に高い文化水準と強いクリエイター精神を持たらした。これは第二次大戦後の日本の持つ最も貴い資源であり、このことによって日本は急速に世界の進んだ科学技術を取り入れ、自国の産業システムを急速に形成し、そして世界の資源(科学技術資源と自然資源)を十分に活用して自国の飛躍を成し遂げることができたのである。

近代化建設に直面する中国において、経済建設の際にぶつかる障害は経済的要素もかなりあるが、国民の文化水準の低いことは最も重要な要素である。民族全体の文化水準を引き上げることが、中

国の近代化建設を成功に導く重要な鍵であることは疑いもない。

日本に来てから、どこへ行っても、社会が安定していると感じた。私の考えでは、経済発展によって人々の心が落ち着いたばかりでなく、日本政府の行った正しい国民教育政策、特に青少年育成政策の占めるウエイトが大きいと思う。

また日本ではどこへ行っても日本の青少年教育指導者の存在を感じた。幼稚園から大学へいたる素晴らしい学校教育体系を擁するばかりでなく、政府の各部門と民間機構が共同で組織した大規模かつ緻密な社会教育体系を持ち、43の都道府県に設置された青少年対策本部によって、この2つの体系の正常な活動が保たれているのである。

日本訪問を通じて、私は日本民族の勤勉さ、優しさを身をもって体験した。日本人は(私の知る範囲内では)教養の高さ、社会環境の良さのためか、上品さと礼儀正しさを常に感じさせている(ときには、度を越して不自然な感じを与えるが)。また、社会経済の急速な発展と生活のリズムの速さは、人々の勤勉さと向上心をもたらした。このような精神状態は、間違いなく国民経済の発達の高強い原動力となっているのである。

日本経済の飛躍は、もちろん、さまざまな要素の成功が互いに結合した結果だが、国民教育がその中で果たす役割の大きさは、日本を視察した者のみの知るところであろう。

日本での1ヵ月の見学は、悪い面よりいい面をたくさん見せてもらって、よい勉強になったと感じている。日本経済の成功を実際に見たり聞いたりし、有益なヒントをたくさん得ることができた。また、中国の人々に対する日本の人々の友情も、身にしみて感じた。駆け足の30日間だったが、ほんとうに来たかいがあったと思う。

## 3. 合宿セミナー参加日本青年の声

### 合宿セミナーで学んで

加藤 美恵  
千葉県・公務員

セミナーが終わって半月も過ぎると、期間中の気迫はどこへやら、これまでと同じ生活について流されてしまいそうになります。しかし、本セミナーでは2泊3日とは思えないほど濃縮された時間を送り、心の底に確かに染み入るものがありました。

まず第1に、お隣の中国に対して理解を深め、それにつれて新たに興味がわいてきたことです。「世界の人口の4分の1を占める国」の実情をつかみ、同時に未来へのパワーも感じる事ができました。

第2は、自分の国である日本はもとより、自分を取り巻く環境に対する認識の甘さを痛感させられた点です。今回は農村経済青年が対象であったことから、多少なりとも農業に関わる者として意気高く参加したのですが、思うように説明することができませんでした。中国の皆さんにお詫びするとともに、この経験を良い薬として、今後も自分なりに勉強を続けていかなければ……と感じ入りました。また、善役は身近にあっても気にもしない「日本文化」を私たちなりに伝え、その良さを改めて確認もしました。

中国の農業については、1戸あたりの経営耕地が日本より狭いという話に驚きました。工業化の進展に伴って委託による集約化が進んでいるのですが、現在の日本を顧みると、農業がないがしろにされることなく、農村が近代化されるように願って止みません。

今回のセミナーに参加して、中国各地や日本中に友人ができ、自分の世界がとても広がりました。また、身近にも中国に農業の視察に行かれた方がいて、現地のお話を聞いたりしました。このような素晴らしい機会がいつまでも続き、多くの人の参加を得て、国際交流と相互理解の輪が広がることを希望します。

### 合宿セミナーに参加して

倉科 和子  
東京都・学生

“私みたいな大学生じゃ何の役にも立たないかもしれない”。日本青年館へ向かう道を歩きながら、私の心の中は不安でいっぱいでした。

実際、農業知識のない私はそういう点では役に立たなかったかもしれませんが、しかし自由時間に、中国の人口・家庭・教育について、また日本の大学生のことなどさまざまな話をし、仲良くなったことは、ほんの少しではあるけれど中国と日本の友好を深めるのに役に立ったのではないかと思います。

今回のセミナーで一番心に残っているのは、第1日目の夜のできごとです。私はロビーから部屋に戻ろうと廊下を歩いていた。ちょうど部屋の前あたりに来たとき中国の方に会い、「今から部屋に遊びに来ないか」と誘われたのです。私の中国語の能力じゃちょっと不安だな、とは思ったのですが、せっかく仲良くなるチャンスなんだから、思い切って行ってみました。

部屋では3人の中国の方が将棋のようなものをやっていて、私が入って行くと、「教えてあげるか

らやっごらん」と席をあけてくれたのです。私は救わりつつ始めたのですが、なにせ日本の将棋すら知らないのですから、1度説明を聞いたくらいじゃさっぱりわかりません。考えて動かしたつもりでも、「不行」(だめだよ)といわれてしまい、結局のところ、私は周りの人に言われる通りに動かすだけでした。

こうして1度目が終わるころ、同室の満尾さんが戻って来て、今度は2人でやるはめになってしまったのです。すでに頭が疲れてしまった私も、満尾さんも、結局よくわからず、私は終わったときはうれしくらいでした。なかなかつらかったような気もするのですが、今考えてみると楽しかったような気もする面白い経験でした。

今回来日した中国の方は地位のある方ばかりなのに、こうして私と将棋をしたり、質問に懸命に答えてくれたり、冗談を言ったりと、スケールの大きさや温かさを感じ、うれしかったし、勉強にもなりました。

## 歌の国際交流

辻 淑子

滋賀県・中学校臨時講師

歌をうたうことが大好きな私ですから、合宿セミナー中、何が一番心に残ったかといえば、やはり歌をうたった数々の場面です。

“交流のつどい”でも歌いました。セミナーの始まる前の晩、全国から日本青年館に集まって、“つどい”や分科会の準備をしました。“つどい”係の方は、深夜の2時までかかって歌詞などの準備をして下さいました。私も1曲、中国の「草原情歌」を書かせてもらい、歌詞の用意はバッチリです。あくる日、山中湖の会場に向かうバスの中では眠さに負けず歌の練習でした。“つどい”も楽しかったのですが、練習もまた楽しかったのです。

さて、歌の国際交流は、“つどい”の場だけでは

ありませんでした。夜遅くまで私たちとの話につき合ってくれた中国の方が、深夜の2時に歌って下さったチベットの子守唄。深く心にしみるメロディーでした。

別れの日の朝、小型バスで山中湖岸に出掛ける途中の彼らは、散歩中の私たちを拾って下さいました。さあそこで、“小のど自慢”の始まりです。朝食の後も、1つの部屋に10人ほどが輪になって座り、流行歌・民謡・童謡・哀歌などが、日本語で、中国語で次々と歌われました。

こんな自然発生的に生まれた“歌の交流会”が忘れられません。それは、楽しく、かつ心暖まるものでした。

今回、“つどい”で使った歌詞は、前の晩に書いたものをコピーしたものでした。それはそれで、自分たちで作ったという意味でよかったのですが、もう少し充実した歌集があればよかった、という思いもあります。

もしも今後、中国の歌集を集めた歌集作りが行われるというようなことがありましたら、私もできる限り協力させていただきたいです。

合宿セミナーが終了し、日本青年館に帰るバスの中でも、やっぱり歌いました。別れの寂しさと出会えた喜びをかみしめて。歌は最高の心の交流です。



---

---

## 「日中青年の友情計画」に参加して

大石 清彦

神奈川県・専門学校教師

私は、JICAの主催するこのような計画がすでに実施されていることは、今回の機会がなければまったく知るよしもなかった。今回の「日中青年の友情計画」中に当校（日本工学院専門学校）見学が組まれていたことが幸いし、私にその機会がめぐってきたわけである。

中国青年留学生は、私の勤務する学校にも幾人も在籍されているので、この人たちとは常に接しているが、今回のように、中国の指導者的立場の青年に接するのは初めてであった。

特に中国教員による講演「中国の教育事情」は興味ある話が多かった。教育改革が1978年から実施され1988年まですこやかに発展してきたが、しかし教育が社会の発展に対して遅れていること、小学校入学率97.1パーセント、中学校入学率70パーセント、普通高校入学率40パーセントであること、基礎教育である9年制の義務教育は、地方の責任で行っていること、現段階では小・中学校教育に力を入れており、今後、一番力をいれなければならないのは中学校教育の普及である、といった話には、深く考えさせられた。

さて、トリム研修センターでの宿泊は日本と中国の双方が同宿することになっており、私の部屋は、川崎の高校で国語の先生をされている原先生と、中国で科学教育部副部長をされている胡<sup>フ</sup>さんの3人であった。原先生と私は中国語ができず、胡さんは日本語と英語ができなないので、言葉はまったく通じず、最後の手段として筆談で意思の疎通を図った。3日目、いくつかの動詞と、漢字の並べ方がわかってきて、意思の疎通も少しずつ楽になってきたころ、残念ながらお別れとなってしまった。

今回の研修では、通訳の方や筆談を通じて、中

国の、表面からは見ることのできない深い面を認識させられ、超大国のきびしい現状の一面を垣間見たように思う。私にまた1つ歴史が加わったように思う。

---

---

## 合宿セミナーを終えて

田辺 博史

埼玉県・教員

中国と中国人についてもっと知りたいという気持ちで、合宿セミナーに参加した動機でした。参加の前に、中国の歴史・中国人の考え方・今中国で問題になっていることなどを知るために、本を何冊か読んである程度整理して臨みました。

合宿セミナーを終えた今、問題として次のことがいえると思います。

- 1 交流が一方通行的なところがあった。
- 2 言葉が話せないで、個人レベルでの話し合いがよくできなかった（通訳の人は食事中や分科会でよく通訳してくれましたが）。

1、2で書いたことは、今回の合宿セミナーが日本人と中国人参加者にとって有意義でなかったということではありません。

1に関しては、分科会等で中国人参加者からの質問が多く、日本人参加者からの質問が少なかったのです。交流であるから、一方だけが何かを与えたり話したりするのではなく、お互いに何かを提供し合わなければよい交流にはならないと思います。

2に関しては、中国の参加者は英語があまり話せなかったで、中国語が話せればよいなと思いました。いろいろと細かいことやほんとうはどうかを聞くのに、個人レベルでの話し合いが大切といえます。

分科会の前に行われた講演で、日本人参加者の中から現場報告として今中学校が抱えている問題が、また高校からは、生徒が中国をどれだけ知っ

ているか、中国に対してどのようなイメージを持っているかがアンケート調査をもとに紹介されました。さらに、大学生が彼らの日常生活を紹介し、全体的かつ具体的に状況を説明したので、中国側参加者にかなり理解してもらえたと思います。

体育館で行われたゲームやスポーツ交流では、お互いに性格を出しあったので国民性を肌で感じることができて、こんなに楽しいことはありませんでした。

終わりに、最近聞く言葉に「文化の否定性——自分たちがつくってきた文化が、自国に否定的作用すること」があります。私は何ヶ国かの交流会に参加して、このことがかなり説得力を持つことがわかってきました。それに気づくためには、交流がほんとうに必要です。文化に関しても、本を読んで頭で考えているだけでは十分ではありません。

今回の合宿セミナーでの交流が、中国人参加者にとってプラスになるだけでなく、日本人参加者にとってもかなりインパクトがあったと思います。

この合宿セミナーに参加させていただいたことに感謝します。

---

## 「日中青年の友情計画」合宿セミナーに参加して

岡村 稔  
千葉県・公務員

10月29日および30日の国立オリンピック記念青少年総合センターにおける事前研修を経て、11月18日から21日までの間、奥志賀における「日中青年の友情計画」に基づく合宿セミナーに参加した。

参加することが決まった当初は、仕事から解放される4日間が間違いないやってくるということで、内心ほくそえんでいたものであるが、事前研修への参加後は、日本の団員との親交は深まったものの、過去に、このような形で直接外国人と接



することがなく、まして、中国語にあっては、ラジオ放送のチューニングの際にしか耳にしたことがないという自覚が徐々に頭をもたげてくることとなり、意思の融通をいかにして図るかを考えると、気持ちもやや沈みがちになったものである。

集合当日は、結局、事前研修において配布された中国語その他の資料を1度も開くことがなかったことを悔やみつつ浅草ビューホテルに向かった。

事前研修当時から過ごし方が懸念されていた8時間という長い車中においては、日本側団長である安田女史の見事な采配により、漂っていた緊張感も自然のうちに解消し、個人的には、幸いにして近くの席に夏<sup>ナツ</sup>氏が座っていたこともあって、その通訳またはペンを介することにより、タイミングを失することなく、比較的容易にうちとけていくことができ、これが精神的に好影響をもたらし、後の合宿がおおいにリラックスさせられることとなった。

中国青年側から、同国において実施されているという「1人っ子政策」を意識してのことか、あらかじめテーマの1つとして青少年の健全育成、非行防止が掲げられていたことから、講演および討議はその方面に集中することとなり、内容も充実し、双方にとって有益なものとなったと考えるが、そのほか、中国青年諸氏は、政治・経済等の

社会制度がまったく異なる中であって、日本について豊富な知識を有し、わが国の習慣、生活形態等についてまで広く質問するにおよび、合宿を通して終始積極的かつ真摯に理解を深めようとする熱意がうかがわれ、頭の下がる思いであった。

また、自然を介し言葉を越えた交流ができた体育としてのスキー、さらに、万国共通とも言えるであろう杯を酌み交わした酒席のことも忘れ得ない大きな成果であったと思う。

わずかの期間ながら、これらの交流を通じて相互に理解を深め、大勢の友人を得たことは、各個人にとって大きな財産となり、更には日中友好の一助となるものとする。今後、このような機会をあまねく若い人たちに与えられることを願ってやまない。

最後に、日本側団員および今回お世話いただいたユース開発協会等関係者の皆様にお礼を申し上げ、筆を置くこととしたい。

---

---

## 頑張れ！<sup>タイ</sup>戴さん

真先 薫

東京都・公務員

「時間が足りない。時間がもっとほしい。私には、勉強したいことがたくさんたくさんありま



す」。

上海からやってきた戴<sup>ダイ</sup>さんは、言った。

上海市青年連合会委員であり、共産主義青年団上海市委員会市区業務部部长である彼は、青年団40万人、組織数300の調整連絡を一手に引き受ける若きエリートである。

昭和63年11月18日から21日までの3泊4日、奥志賀高原で実施された「日中青年の友情計画」青年指導者合宿セミナーの討議での1コマである。今回の合宿セミナーのテーマが、「青少年の健全育成・非行防止」ということで、私の職務が若干関係していたということと、私の上司が参加するように勧めてくれたことが重なり、幸運にも参加することができた。

しかし、討議における彼（彼ら）の質問は、実に厳しかった。「システムは……？ 組織は……？ 予算は……？ 具体的活動状況は……？ 法的根拠およびそれを実現させるための保障は……？」と……。私たち、日本人団員は、だれ1人として明確に解答できる者はいなかった。かろうじて、自分の職務に関係する範囲で解答することができただけであった。

中国では、現在、「青少年保護法」の立法化に向かって、国中が努力している最中である。青少年に係わる仕事をしている彼らにとって、根拠となる法律が無いことから、その活動を行う組織自体が確立されず、当然なことに予算的措置もなされていないという。

また、中国では、人口増加対策として「1人っ子政策」が推進され、加えて夫婦共働きが普通であるという。

仕事における苦勞は、あたりまえのこととし、家事に、教育にと追われながらも、常に前進をしていこうとする戴<sup>ダイ</sup>さんは言う。

「今、英語を勉強しています。将来は法律も勉強しようと思っています」……と。

頑張れ！ 戴さん！ 私も頑張る！

## 4. ホストファミリーの思い出

### 身近になった隣国

齋部 初美

香川県・公務員

私の住む満濃町は、空海が中国より持ち帰ったといわれている花梨の木を町木に指定し、今「カリンの里」として村おこしが盛んな、中国とはなにか縁がありそうな町なのです。

今回、この満濃町4家庭に8名の方を2泊3日で受け入れることになりました。私の家は、団長である山西省青年連合会副主席の支さんと通訳の祝さんでした。そのため、何か失礼があってはいけないと、家族全員最初は少々緊張気味でした。しかし、支さんと祝さんのさわやかな笑顔と気さくな人柄は、家中を一変して和やかなムードにしてくれました。家族7人と支さん祝さんに加え、父のうれしそうな電話を受けてやって来た近所の人や親戚の人たちで、わが家の応接間は一時パニック状態と化したのでした。

翌日は、午後から4家族でバス1台を貸し切り、満濃池や四国ニュージーランド村などに行きました。途中の公園で、枕木やタイヤが利用されているのを見た支さんが、「廃物をも生活の中うまく取り入れるという日本人の知恵の深さと発想の豊かさが、日本を発展させたのかもしれない。私たちも見習わなければなりません」と言った言葉に私は驚くとともに、支さんの自国に対する熱意を感じずにはいられませんでした。

夜、近くの公民館で青年団の方々や婦人中国語講座の方々との交流会を終えたあと、家に帰って来た支さんと祝さんが「この家はほんとうに温かくて、わが家に戻ったような気がします」と言っ

てくれたことが今も思い出されます。それを一番喜んだのは、やはり父母のようでした。

2泊3日と短い期間ではありましたが、ほんとうに素晴らしい体験をさせていただけたことを感謝しています。

最後になりましたが、日中の平和と友好が今後も永遠のものであり続けることを心から願っています。

### 鐘さん、黄さん、謝々

大山 和也

香川県・公務員

1988年は、私にとって中国を身近な国と感じた1年だった。まず、夏に「青年の翼」という県の事業に参加でき、2週間中国の各地を訪問し、2日間ホームステイを体験できたことが1つ。それと、その時のホームステイの恩返しという気持ちもあり、今回「日中青年の友情計画」に参加した中国青年2名のホームステイを引き受けたことである。

鐘さんは海南大学経済学部の講師、黄さんは化学工場の工場長ということで、前途有望な青年たちである。鐘さんも黄さんも礼儀正しく、積極的に私たちと交流を深めたいという気持ちが伝わってきました。

2人とも、日本の企業経営に非常に興味を持っており、国鉄・電電公社の民営化、企業の賃金制度、公務員制度について、私の片言の英語と2冊のメモ帳を全部使い切るほど筆談で話し合った。2人が強調していたことは、中国が経済発展するためには、外国企業との合弁企業と民営化された

資本原理に基づいた企業を設立していかななくてはならないということだった。

私も含め3人とも独身ということもあって、お互いに「スリーシングル」と呼び合い、結婚についても気楽に話し合った。言葉が通じなくても、漢字という共通文化のおかげで意思疎通がかなりできたように思う。

別れの前日の夕食では、私の家族とこたつを囲んで鍋をつつき、「乾杯」と言って一気にお酒を飲み干し、お互いに歌（“北国の春”など）を歌ったりして、楽しく過ごすことができた。わが家にとっては、ホームステイの引き受けは今回が初めてであり、両親などは困惑していたが、いざ引き受けてみると、同じ人間なんだということが実感できたようである。

最後に、鐘さん、黄さん、謝々（ありがとう）。

## 世々代々までの友情を

佐々木 末利  
島根県・自営業

「你好」は私たち、「はじめましてどうぞよろしく」と言ったのは王さんと吐爾迪さん。お互いに相手の国の言葉で交わしたあいさつ。

異国の人を迎える不安は、初めのそんなあいさつで吹き飛んでしまった。片言と単語を並べた筆



談と、そしてパンフレットに載っている必要な言葉を指さしながらも、お互いの会話はつながった。少々わからないことでも、笑顔でカバーしてしまう。言葉の違う人たちが冗談を交えたりしながら、こんなにも楽しく語り合えるものかとうれしくなりました。

いろいろなことを知りたいという好奇心は双方とも同じで、私たちも地球儀を回しながら中国の話聞き、あらためて中国の広大さを感じ、大陸の人のおおらかさを感じました。

家族に3人の子供たちがいたことは、とても幸せなことでした。2人の年代は私と同じくらいで、ちょうど同じ年ごろのお子さんがおられるということで、話題はうんと広がりました。子供たちは大喜びで新疆のダンスを習ったり、中国の学校のことなどを聞きました。

戦時中、中国で過ごしたことがある父も、すっかり意気投合し、王さんと一緒に風呂に入り、背中を流し合ったとか……。その父があとで、「ほかの国の人でもこんなに仲良くなれるのに、どうして戦争なんかしたのかなあ。戦争は人を傷つけることなのに……」とポツリと言いました。世界の人はお互いの文化を尊重し、認め合えば、皆仲良くなれると思う。子供たちにそのことを、そして平和の尊さを話してやらなくては、とあらためて思いました。

わずか2～3日でも一緒に楽しく過ごせたあとは別れがつらく、8歳の長女は「別れるのが寂しくて泣いちゃった」と言った。王さんと吐爾迪さんがたたれる日、感謝のメッセージがしたためてあり、その心づかいにあらためて感動しました。再会と世々代々の友情の継続を約束して別れたが、子供たちが成長した時、さらに日中は友好を深め、再会が実現できれば素晴らしいと思います。とても貴重な体験をさせていただけたことに心から感謝いたします。



## 平常の家庭料理で接待

山崎 亮  
島根県・公務員

私は、1988年9月23日から10月23日まで中国の上海市・西安市・北京市・大連市を訪問して、水産局や貿易局を訪ねたり、北京市では中日友好協会を表敬訪問するなど、中国の皆さんと交流してきた。

帰国してまもなく、「日中青年の友情計画」に基づいて招かれた24名の中国青年（教員グループ）のうち10名の皆さんが、10月26日から28日まで、ホームステイを主な目的として浜田市を訪れることを聞いた。早速、この10名の皆さんを歓迎するための実行委員会を組織するとともに、ホームステイ受け入れの希望を申し入れたところ、快諾をいただき、居雲峰（副長）、鄭玉芳（秘書長）の2名の方をわが家に迎えることができました。

率直に言って、受け入れにあたっては、2つの不安がありました。その1つは言葉の問題、2つには食事のことでした。幸いなことに、鄭さんが日本語が話せることを知らされ、第一の不安は解消されましたが、食事については不安でした。

しかし、せっかく日本を訪問されたことであり、家族ぐるみの交流であるので誠意をもって、新鮮な材料で平常の日本の家庭の食事を提供すれば喜んでいただけるのでは……と家族とも相談し、私たちの平常の食事と同じものを提供しました。朝は味噌汁と漬物、昼は焼き魚、晩は湯豆腐やヒラメの刺身といったものです。居さんも鄭さんもこの食事をたいへん喜び、私たちも心からホッと喜んで喜びました。

わずか2泊3日の生活でしたが、夕食をとりながら居さんは中国民謡を歌い、私の娘2人はフルートの演奏と楽しいものでした。特にすずりと筆を持ち出して一筆を依頼すると、快く「満楼春風」と達筆に、私も「春風献上」と下手な字を書くと、



「よい土産ができました」と喜んで持ち帰っていただきました。

生活を共にしたわずかな間でしたが、旧友と再会したような感激でした。お別れの際は、お互いに再会を願い、別れを惜しんで、涙をとどめることができませんでした。

## 中国青年のホームステイを終えて

仁井 重子  
徳島県・農業

中曽根前首相が61年に訪中した際、21世紀に向けて、日中両国の友好と協力の関係をより強固かつ実りあるものとするため、未来の国造りを担う中国の青年をわが国に招へいして、日本の同世代の青年との交流を通じ、相互理解を深め、真の友情と信義を培うことを目的とする計画を提唱して、中国の同意を得ました。

本年度は中国から農村経済青年、都市経済青年、教員、青年指導者等の中から、特に指導的立場にある人々と総計4人を含めて100名を11月6日

～12月6日まで1ヵ月招へいするのでした。

農業関係の24名が来徳するのは11月9日～28日までの10日間。そのうち2泊3日をホームステイすることになりました。青少年婦人室からその依頼があり、私も61年度に青年・婦人中国訪問団の一員として中国へ参ったときにいろいろお世話になりましたので、喜んでお引き受けしました。

わが家へお招きしたのはお2人で、朱<sup>ジュウ</sup>重<sup>チュウ</sup>庆<sup>ケイ</sup>さんは浙江省の青年連合会常務委員で750名の従業員を有する大きな染色工場の工場長。莫<sup>モク</sup>建<sup>ケン</sup>成<sup>セイ</sup>さんは内蒙古<sup>ネイ</sup>の<sup>モウ</sup>烏<sup>ウ</sup>海<sup>ハイ</sup>市の政策研究室の研究員でした。朱さん35歳、莫さん32歳。年齢はお若いですが、いずれもさすがに悠揚<sup>ユウヤウ</sup>迫<sup>セ</sup>らぬ大人の風格を漂わしていました。

当日は、お願いしてあった鴨島農協の運営や施設を見学しましたが、指導員の片岡さん、川村さんのお2人が、予冷库や真空包装設備をはじめ各支所まで案内してくださって、両人とも感心してメモしていました。ニンジン、ナスのハウスにも関心をもって、筆談で資材費や粗収入などもノートしていました。

午後はレクリエーションで、飯尾の住友正さんのご好意で枝もたわわになっているミカンを取らせていただき、日本語で「オイシイ」を連発して喜びました。住友さんに心からお礼を申し上げます。

翌19日には9時半の列車で徳島をあとにしましたが、去る者も送る者も「再<sup>ソウ</sup>見<sup>ケン</sup>」を繰り返しながら、両の目に涙を湛えていました。この涙こそが真底からの日中友好のしるしだと感動したことでした。

## 国際交流の輪

向川 真澄  
福井県・公務員

1月のある日届いた手紙、それは中国・北京か

らの手紙でした。中国語で書かれた手紙と、数枚の写真が同封してありました。中国語はほとんどわからない私ですが、その手紙を手にしたとき、「ホームステイを引き受けてよかった」と思いました。

彼女の名は、葉<sup>エフ</sup>学<sup>ガク</sup>麗<sup>レイ</sup>さん。医者のご主人と子供さんを中国に残して、1ヵ月にもわたる研修に参加できるということに、日本（特に福井）の女性との立場の差を感じました。

ホームステイは、61年に近畿青年洋上大学に参加したときにお世話になった県の青少年婦人課の方から声をかけられたことがきっかけでした。軽い気持ちで引き受けたまではよかったのですが、事前の説明を受けたりして当日が近づくにつれ、初めてのこともあってだんだん不安になりました。

しかし、実際やってみて思ったことは、形ばかりにとらわれず、福井の家庭のごく一部でも見てもらえれば、それでよいのではないかということです。2泊3日（実際には2泊2日くらい）の日程で観光ばかりであれば、いったいどれくらいのことがわかってもらえるでしょうか。ほんとうの意味でのホームステイとは、一緒に食事を作ったりそれを食べたりして、共に生活することが大切なのではないでしょうか。とはいっても、私の家でも観光にほとんどの時間をとられてしまったというのが現状です。

また、今回は前回と違って通訳の人がついてくださったのですが、通訳の人がついているとどうしても頼ってしまい、その人がいないと場がしらけてしまったのも、慣れない私のせいかと反省させられました。

日本人は国際人になりきれないとよく言われますが、このような機会をいかして、少しずつでも国際交流の輪を広げていくことが、国際人になっていくための一歩ではないでしょうか。

| 実 | 績 | 資 | 料 |

# 1. 国内実施日程

中国総団

		プログラム内容		実施場所	
11/6	日	来 日	日程等説明	東京	
7	月	本計画のブリーフィング 歓迎会	JICA総裁表敬訪問	関係団体表敬訪問	"
8	火	総務庁および外務省表敬訪問	関係団体表敬訪問	武道鑑賞および交歓会	"
9	水	関係団体表敬訪問		JICA主催夕食会	"
10	木	関係団体表敬訪問	中国大使館訪問	"	
11	金	総理大臣表敬訪問		"	
12	土	熱海へ移動	都市経済青年グループ合宿セミナー視察	静岡	
13	日	< 箱根見学 >		神奈川	
14	月	< 富士市内視察 >		静岡	
15	火	掛川視察	東京へ移動	"	
16	水	< 自主研修 >		東京	
17	木	東京都立大森高等学校訪問	自主研修	"	
18	金	長野へ移動	青年指導者グループ合宿セミナー視察	長野	
19	土	青年指導者グループ合宿セミナー視察		"	
20	日	東京へ移動	自主研修	東京	
21	月	徳島へ移動	知事主催歓迎レセプション	徳島	
22	火	土成農業協同組合視察	河野メロクロン（花卉）視察	交流会	"
23	水	藍染め体験実習	大鳴門橋見学	"	
24	木	松江へ移動	知事主催歓迎レセプション	島根	
25	金	多根保育所および多根小学校訪問	掛合中学校訪問	地元青年との交歓会	"
26	土	リンゴ狩り	自主研修	"	
27	日	< 自主研修 >		"	
28	月	広島へ移動	自主研修	広島	
29	火	平和記念公園見学	宮島・厳島神社見学	"	
30	水	東京へ移動	自主研修	東京	
12/1	木	< 自主研修 >		"	
2	金	< 自主研修 >		"	
3	土	< 帰国準備 >		"	
4	日	< 帰国準備 >		"	
5	月	評価会 帰国についての説明・諸手続き		歓送会	"
6	火	帰 国		"	

## 中国都市経済青年グループ

		プログラム内容	実施場所
10/6	日	来日 生活ガイダンス	東京
7	月	本計画のブリーフィング 歓迎会 日本語学習 団体のプログラム紹介	"
8	火	講義「日本の社会と風土」 講義「日本の歴史と文化」 武道鑑賞および交歓会	"
9	水	三菱自動車工場見学 東芝科学館見学	"
10	木	講義「日本の産業史」 講義「日本の経済」	"
11	金	講義「日本と中国」 総理大臣表敬訪問	"
12	土	熱海へ移動 合宿セミナー開講式 講演「日本経済の発展と合弁契約について」 分科会	静岡
13	日	分科会 講演「日本における企業の役割と経営者の意志決定」 分科会 交流の夕べ	"
14	月	分科会 分科会総括 質疑応答	"
15	火	東京へ移動 富士山五合目散策	東京
16	水	総務庁講義「民営化政策」 日商岩井社訪問	"
17	木	国会議事堂見学 東京証券取引所 東京タワー見学	"
18	金	日本経済新聞社見学 高松へ移動	車中泊
19	土	県知事表敬訪問、県勢概要説明 ホストファミリー対面式 歓迎レセプション	香川
20	日	< ホームステイ >	"
21	月	瀬戸内海遊覧 セシール（通信販売）工場、タケヤ電気見学	"
22	火	三越高松支店見学 多田野鉄工所見学 交流の夕べ	"
23	水	小豆島見学	"
24	木	県立高松高等技術学校見学 加ト吉（冷凍食品）訪問	"
25	金	国立香川県大学附属幼稚園、精神薄弱者養護施設「ふじみ園」、四国電力取出発電所訪問	"
26	土	魚市場見学 善通寺総本山訪問、記念植樹 スポーツ交流	"
27	日	< 自主研修 >	"
28	月	広島へ移動 平和記念公園、原爆資料館見学	広島
29	火	宮島見学 日本たばこ産業株式会社見学	"
30	水	京都へ移動 金閣寺、清水寺見学	京都
12/1	木	横浜へ移動 松下政経塾訪問 東京へ移動	東京
2	金	銀座散策	"
3	土	< 帰国準備 >	"
4	日	< 帰国準備 >	"
5	月	評価会 帰国についての説明・諸手続き 歡送会	"
6	火	帰国	"

中国農村経済青年グループ

		プログラム内容	実施場所
11/6	日	来日 生活ガイダンス	東京
7	月	本計画のブリーフィング 歓迎会 日本語学習 団体のプログラム紹介	"
8	火	講義「日本の社会と風土」 講義「日本の歴史と文化」 武道鑑賞および交歓会	"
9	水	三菱自動車見学 東芝科学館見学	"
10	木	講義「日本の産業史」 講義「日本の経済」	"
11	金	講義「日本と中国」 総理大臣表敬訪問	"
12	土	セミナー合宿所（山梨）へ移動 セミナー開講式 スポーツ・レクリエーション 交流会	山梨
13	日	基調講演：「日本の農業市場開放・その理由と影響」（日本） 分科会討議(1) 「農村改革」（中国）	"
14	月	分科会討議(2) 全体会討議 閉会式 交流の夕べ	"
15	火	富士山五合目散策 マンズワイン勝沼工場視察	東京
16	水	農林水産省訪問およびブリーフィング 国会議事堂見学 全国農業中央会訪問	"
17	木	農林水産技術会議事務局筑波事務所訪問 農業環境技術研究所見学 食品総合研究所見学 農業研究センター見学	茨城
18	金	神田青果市場見学 地方プログラム（徳島県）への移動準備	東京
19	土	徳島県へ移動 プログラムオリエンテーション・懇談	徳島
20	日	〈 自 主 研 修 〉	"
21	月	県政概要、講義「徳島県の農林業」 柑橘農業視察および意見交換 徳島県知事表敬訪問 徳島県加工農協共同連合会・果汁工場見 学 知事歓迎レセプション	"
22	火	土成農協視察（集荷場、トマト施設栽培見学）河野メリクロン視察 地方青年との交流会	"
23	水	藍染「藍布屋」見学 大鳴門橋視学（記念館見学後、淡路島へ）	"
24	木	県立農業大学校視察および学生との意見交換 農業試験場視察 ホームステイ引渡式	"
25	金	〈 ホ ー ム ス テ イ 〉	"
26	土	〈 ホ ー ム ス テ イ 〉 さよならパーティー	"
27	日	〈 自 主 研 修 〉	"
28	月	広島へ移動 平和記念公園／原爆資料館	広島
29	火	宮島見学 広島市内見学	"
30	水	京都へ移動 二条城 古代友禅苑	京都
12/1	木	嵐山 金閣寺 清水寺 太秦東映撮影所「映画村」	"
2	金	東京へ移動	東京
3	土	〈 帰 国 準 備 〉	"
4	日	〈 帰 国 準 備 〉	"
5	月	評価会 帰国についての説明・諸手続き 歓送会	"
6	火	帰国	"

中国教員グループ

		プログラム内容		実施場所
11/6	日	来日	生活ガイダンス	東京
7	月	本計画のブリーフィング 歓迎会	日本語学習 団体のプログラム紹介	"
8	火	講義「日本の社会と風土」	講義「日本の歴史と文化」 武道鑑賞および交歓会	"
9	水	東芝科学館見学	東扇島火力発電所見学	"
10	木	講義「日本の産業史」	講義「日本の経済」	"
11	金	講義「日本と中国」	総理大臣表敬訪問	"
12	土	筑波学園都市訪問（概要説明・筑波博覧館）	東京タワー	"
13	日	自主研修	浅草・銀座見学	"
14	月	文部省訪問（講義「日本の教育事情」）	総務庁訪問（講義「青少年の諸問題」）	"
15	火	日本電子工学院訪問	NHK放送センター見学	"
16	水	東京証券取引所見学 参議院訪問	早稲田大学訪問（概要説明、交流会等）	"
17	木	東京都立大森東高校訪問（概要説明・授業参観・茶道・教職員との懇談等）		"
18	金	松下政経塾訪問（概要説明・施設見学・昼食会）	神奈川へ移動 スポーツ交歓会	神奈川
19	土	中国教員講演「中国の教育事情」	グループ別討議	"
		日本教員講演「日本の教育現場からの報告」	交流の夕べおよび交歓会	
20	日	スポーツ交流	東京へ移動	東京
21	月	島根へ移動 武家屋敷・松江城見学	出雲県立図書館訪問 島根ワイナリー 出雲大社	島根
22	火	知事表敬訪問	島根大学農学部附属コンピューター農場見学	"
		雇用促進事業団見学	島根県教育庁教育委員会との懇談会	
23	水	自主研修	ボーリング大会 宍道湖遊覧	"
24	木	国立療養所松江病院見学	松江市総合福祉センター	"
		松江緑が丘養護学校訪問	知事歓迎レセプション	
25	金	多根保育所および小学校訪問	掛合中学校訪問 竹下邸訪問	"
		多根小学校訪問	青年との懇談会	
26	土	りんご狩り ホームステイ家庭への移動		"
27	日		< ホームステイ >	"
28	月		< ホームステイ >	広島へ移動
29	火	平和記念公園 原爆資料館	宮島 厳島神社	"
30	水	京都へ移動	嵐山	京都
12/1	木	銀閣寺、京都大学訪問	金閣寺 二条城 清水寺	"
2	金	竜安寺 東映太秦映画村見学	東京へ移動	東京
3	土		< 帰国準備 >	"
4	日		< 帰国準備 >	"
5	月	評価会 帰国についての説明・諸手続き	歓送会	"
6	火	帰国		

中国青年指導者グループ

		プログラム内容	実施場所
11/6	日	来日 生活ガイダンス	東京
7	月	本計画のブリーフィング 歓迎会 日本語学習 団体のプログラム紹介	〃
8	火	講義「日本の社会と風土」 講義「日本の歴史と文化」 武道鑑賞および交歓会	〃
9	水	東芝科学館見学 東扇島火力発電所見学	〃
10	木	講義「日本の産業史」 講義「日本の経済」	〃
11	金	講義「日本と中国」 総理大臣表敬訪問	〃
12	土	オリエンテーション サンシャイン水族館・展望台見学 東京都青少年センターまつり見学	〃
13	日	自主研修 原宿散策	〃
14	月	総務庁講義「日本の行政管理」 中野サンプラザ訪問、概要説明、館内見学	〃
15	火	講義「日本の青少年政策及び非行防止政策」 東京証券取引所、国会議事堂見学	〃
16	水	日本青年館見学 交流昼食会 こどもの城見学、概要説明	〃
17	木	NHK放送センター見学 多摩少年院見学、概要説明	〃
18	金	合宿セミナー開会式 奥志賀へ移動 オリエンテーション グループ討論	長野
19	土	講義「諸外国における青少年保護システムのあり方」 レクリエーション（スキー） グループ討論 グループ討論 クラブ活動	〃
20	日	講義「青少年保護上の家庭裁判所の機能」 スキー グループ討論 お別れパーティー	〃
21	月	福井へ移動 地方プログラム・オリエンテーション	福井
22	火	工業センター視察 藤野敏九郎の碑見学 県知事表敬訪問、県勢概要 歓迎レセプション	〃
23	水	日本青年との交流（ボーリング） 地下鉄博物館見学 フリートーキング	〃
24	木	中央児童相談所訪問、概要説明、施設見学 増永眼鏡訪問、見学 和紙の里会館見学	〃
25	金	社西小学校訪問 福井放送見学 ホームステイ引き渡し	〃
26	土	< ホームステイ >	〃
27	日	< ホームステイ > さよならパーティー	〃
28	月	お別れセレモニー 広島へ移動	広島
29	火	原爆資料館、平和記念公園見学 縮景園見学 京都へ移動	京都
30	水	嵐山・周恩来先生記念碑 二条城見学 清水寺見学	〃
12/1	木	川島織物見学、概要説明 月桂冠株式会社見学、概要説明	〃
2	金	古代友禅苑見学 東京へ移動	東京
3	土	< 帰国準備 >	〃
4	日	< 帰国準備 >	〃
5	月	評価会 帰国についての説明・諸手続き 歓送会	〃
6	火	帰国	



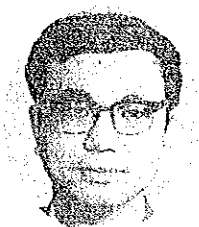
## 2. 中国青年名簿

\*氏名

\*現職

\*出身地

### 総団



李克強（総団長）  
中華全国青年連合会  
副主席  
安徽省



李剛（副総団長）  
中華全国青年連合会  
副秘書長  
山東省



曹衛洲（総団秘書長）  
中華全国青年連合会  
国際部長  
河南省

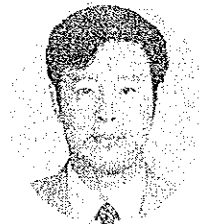


張駿（総団副秘書長）  
中華全国青年連合会  
国際部副部長  
江蘇省

### 都市経済青年 グループ



支樹平（団長）  
山西省青年連合会  
副主席  
山西省



姜明（副団長）  
黒竜江省青年連合会  
副主席  
吉林省



張方青 (副團長)  
山東省青年企業家協會  
會長  
山東省



倪 健 (總書長)  
中華全國青年連合會  
國際部  
職員  
浙江省



閔曉紅  
黑龍江省大慶市經濟委員會  
副主任  
齊齊哈爾市



周 怡  
北京復興商檢二科  
閔務監督補佐  
江蘇省



祝 歆  
外交部  
アジア局日本課職員  
北京



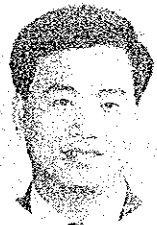
張海生  
山西省潞泉市マイクロ電機工場  
工場長  
山西省



特力更  
内モンゴル自治区党委員会  
政策研究室  
副研究員  
内モンゴル



武 斌  
遼寧省社会科学院  
導研究員  
山西省



辺仁権  
天津市河北区計画委員会  
主任  
天津市



任啓亮  
中国石炭配給総公司  
人事部  
主任職員  
安徽省



姚桂清  
鉄道部第三工程局共産主  
義青年団委員会  
書記  
遼寧省



杜當軍  
河北省邯鄲市製糸工場  
副工場長  
河北省



黄大然

広東省石油化学総廠  
プラスチック包装材料工場  
工場長  
広東省



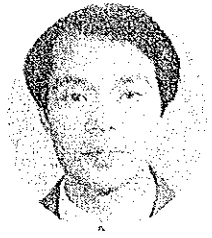
鍾業昌

海南大学経済学院  
講師  
海南省



孫立

上海市滬東自動車運輸  
副社長  
上海市



林偉

福建省青年労働サービス公司  
責任者  
福建省



冷学

吉林省テレビ局  
経済部記者  
吉林省



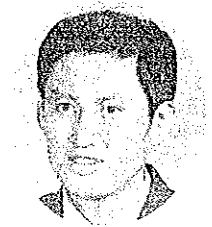
陳玉祥

合肥工業大学  
経済予測・発展研究所  
所長(助教授)  
安徽省



李中印

中国政治体制改革研究会  
社会事業部  
副部長  
安徽省



張勇

青海自動車製造工場  
総経済師  
山西省



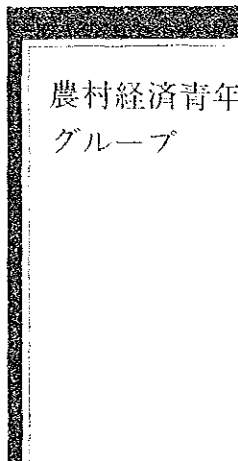
郭蔚如

徐州化工機械工場  
工場長  
上海市

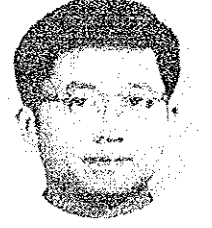


張憲華

武漢市漢陽商場  
社長  
湖北省



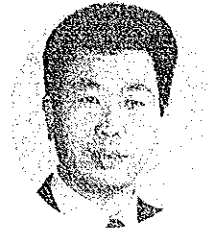
農村經濟青年  
グループ



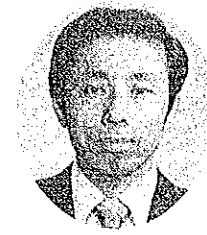
楊三爽(団長)  
湖北省青年連合会  
主席  
湖北省



梅克保 (副団長)  
湖南省青年連合会  
副主席  
湖南省



劉懷廉 (副団長)  
河南省青年連合会  
責任者  
河南省



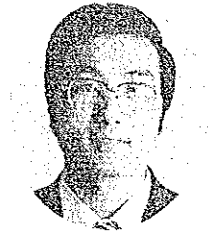
羅世鵬 (秘書長)  
中華全国学生連合会  
国際部部長  
遼寧省



陳益枝  
湖南省農学院農学部  
婁底農業科学研究所  
農業技術師  
湖南省



孫承志  
山東省濰坊市寒亭区  
区長  
山東省



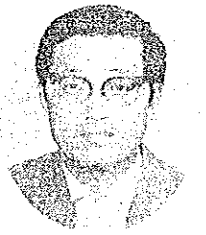
党永平  
甘肅省林業庁  
エンジニア  
黒竜江省



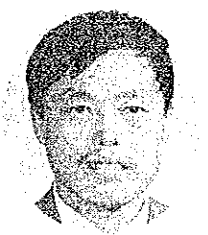
羅義賢  
貴州省銅仁地区農村青年  
經濟技術訓練センター  
主任  
貴州省



莫建成  
内モンゴル自治区  
烏海市党委員会政策研究室  
研究員  
浙江省



陳政高  
遼寧省長海県人民政府  
副県長  
遼寧省



朱重慶  
浙江蕭山染色工場  
工場長  
浙江省



胡義明  
成都市及流線二級曲清工場  
工場長  
四川省



楊秀功  
河北省石家市中原実業総公司  
社長  
河北省



魯向平  
 陝西省農業科学院  
 農業經濟研究所  
 農村發展研究室主任  
 陝西省



劉永祥  
 寧夏回族自治区中衛県良  
 種繁殖場  
 場長  
 寧夏省



龍德榮  
 海南省国营中瑞農場  
 農場長  
 海南省



郭文強  
 柳州地区農村青年  
 生活向上指導者グループ  
 班長兼事務局長  
 広西省



宋洪武  
 河南省樂川県人民政府  
 副県長  
 河南省



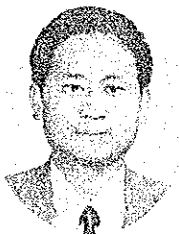
汪洪臣  
 安徽省陽山県園芸場  
 場長(農業技師)  
 安徽省



金巴楊培  
 西藏自治区經濟社会發展  
 研究センター  
 農村經濟研究室  
 助手  
 西藏 拉薩



陸海洪  
 江蘇省設陽県新村  
 村長  
 江蘇省



張李昆  
 共産党永平県委員会  
 副書記  
 雲南省

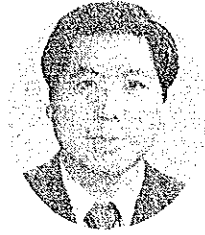


夏秋生  
 湖北省黄岡羅田県大崎区  
 林業農家  
 自営  
 湖北省



陶国清  
 共産党中央對外連絡部ア  
 ジア二局日本課  
 職員  
 湖北省

教員  
グループ



居雲峰 (団長)  
中国青年政治学院  
副院長  
陝西省



万繼抗 (副団長)  
江西省青年連合会  
責任者  
江西省



李柏雲 (副団長)  
共産主義青年団  
四川省委員会  
副書記  
遼寧省



鄭玉芳 (秘書長)  
中華全国青年連合会  
国際部係長  
山東省



徐德霞  
中国少年兒童出版社  
「兒童文学」副主任編集員  
河北省



孫朝暉  
蘭州大学社会心理学  
専任講師  
山西省



鮑初建  
中華全国青年連合会  
事務局主任職員  
河南省



李鳳琴  
「中国少年報」読者係  
編集員  
北京



殷一瑾  
華東市師範大学  
史学科講師  
浙江省



韓亜平  
中国民用航空学院  
教師  
山東省



潘 鐺  
北京市宣武区能力開発セ  
ンター  
学技教導主任  
江蘇省



孫美嬌  
外交部アジア局日本課  
二等書記官  
北京



吐尔迪·吐尼牙孜  
ウルムチ市実験中学校  
副校長  
新疆省



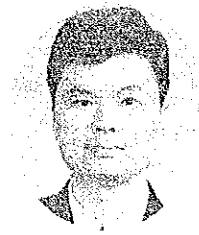
王大文  
青島医学院  
講師  
山東省



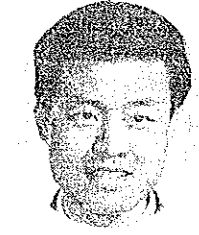
劉健強  
井岡山市傘山中学校  
副校長  
江西省



杜捷  
青海省畜牧獸医学院  
政治經濟学教師  
河南省



周勇  
重慶市党委員会党校  
党史教育研究室  
副主任  
四川省



龐金華  
天津商学院  
講師  
天津市



靳綏東  
河南省青年幹部管理学院  
教師  
山東省



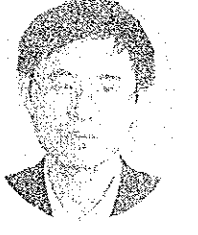
路建平  
中華全国青年連合会  
社会教育部職員  
山東省



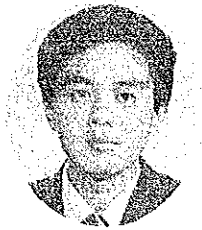
安七一  
西藏青年教育研修センター  
主任  
山西省



胡偉平  
中華全国青年連合会  
科学教育部副部長  
吉林省



劉天鶴  
湖南省中南工業大学  
オートメーション学科  
講師  
湖北省



鄒飛  
 中国人材研究センター  
 職員  
 安徽省

青年指導者  
 グループ



龍忠志（団長）  
 共産主義青年團雲南省委員会  
 書記  
 雲南省



李俊謙（副団長）  
 中華全国青年連合会  
 事務局副主任  
 北京



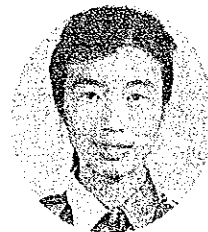
孟曉颺（副団長）  
 文化部社会文化局  
 副局長  
 江蘇省



接克（秘書長）  
 中華全国青年連合会  
 国際部主任職員  
 山東省



呂福玲  
 天津市寧河区共産主義青  
 年団委員会  
 書記  
 天津市



单美娟  
 浙江省青年連合会  
 青年労働部長  
 浙江省



葉学麗  
 共産主義青年団中央事務局  
 秘書課主任職員  
 浙江省



楊晶  
 共産党中央対外連絡部  
 アジア二局日本課  
 職員  
 遼寧省

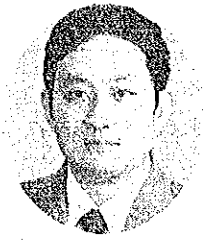


蘇華  
 共産主義青年団陝西省委員会  
 宣伝部長  
 河北省



盛憲昌  
 新疆ウイグル族自治区青  
 年連合会  
 委員  
 黒龍江省





郭 猛

貴州省青年企業管理者協會  
副會長  
山東省



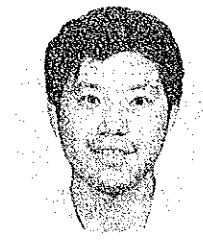
張 魯

國家外國專門家局友誼旅行社  
接待部長  
北京



宋 勇

遼寧省青年連合會  
秘書長  
遼寧省



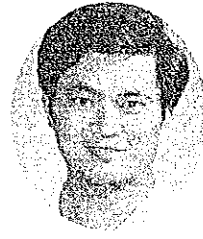
劉曉東

寧夏回族自治區青年企業  
管理者協會  
秘書長  
山東省



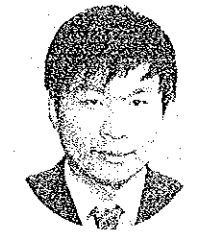
劉興強

廣東省青年企業管理者協會  
責任者  
廣東省



戴 肅

共產主義青年團上海市委員會  
市區業務部長  
江蘇省



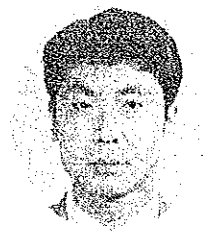
鐵國傑

共產主義青年團北京市委員會  
文化體育部副部長  
北京



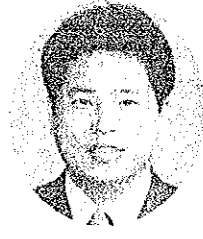
張文瑞

「中國青年報」社  
通信員  
河北省



孫文久

吉林省通化市青年連合會  
常務委員  
吉林省



李金水

福建省青年連合會事務局  
事務局長  
福建省



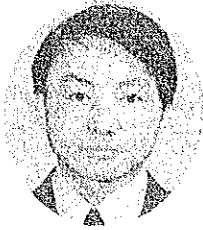
許 宏

共產黨中央本部事務管理局  
サービス課副課長  
山東省

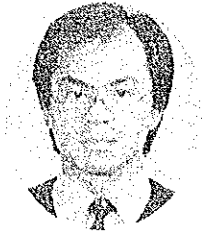


覃 安

廣西チワン族自治区青年  
連合會  
秘書長  
廣西省



湯本淵  
中華全国青年連合会  
国際部職員  
貴州省



劉毅仁  
外交部アジア局日本課  
事務官  
吉林省

(註) 中国青年宛郵便物について、  
中国青年に郵便物を発送する場合は、中華全国青年連合会宛  
に次の要領で送付して下さい。

宛 先

切 手
中華人民共和国北京前門東大街10号 中華全国青年聯合会 請轉交給 1988年中日青年友誼計劃 *2 _____ 团员 *1 _____ 先生收 日本国 *3 _____

- \*1 相手の氏名
- \*2 所属グループ名  
 总团(総団グループ)  
 城市經濟考察团(都市經濟青年グループ)  
 农村經濟考察团(農村經濟青年グループ)  
 教育考察团(教員グループ)  
 青年工作者考察团(青年指導者グループ)
- \*3 差出人の住所・氏名

## 3. 日中青年の友情計画実績一覧

## ●昭和62年度(100名)

	人数	実施協力団体	実施府県	JICA支部	地方協力団体	県等窓口機関	プログラム コーディネーター	JICA コーディネーター
総団	3						居崎 司	上 黎 杰
勤労青年	25	世界青少年交流協会	大阪	関西	大阪世界青年友の会	大阪府教育委員会 青少年教育課	牧尾春奈	花 蘭 謙 高 菅
教員	25	国際交流サービス協会	長崎	九州	長崎県海外協会	長崎県総務部総務学事課	鳥居 秋子	林 洋子 清田 明
農村青年	25	中央青少年団体連絡協議会	福井	中部	福井県青少年団体連絡協議会	福井県県民生活 部青少年婦人課	清水 昇	品田理恵 大塚 烈
青年指導者	22	日本経済青年協議会	滋賀	関西	日本青年国際交流機構	滋賀県労働部観光物産課	坪津雄一朗	馬場節子 寺沢佳代

## ●昭和63年度(100名)

	人数	実施協力団体	実施府県	JICA支部	地方協力団体	県等窓口機関	プログラム コーディネーター	JICA コーディネーター
総団	4	国際協力サービス・センター					居崎 司	林けいな
都市経済青年	24	世界青少年交流協会	香川	四国	香川県海外派遣友の会	香川県民生部青少年対策室	西 忠雄	山本知里 工 黎 杰
農村経済青年	24	中央青少年団体連絡協議会	徳島	四国	徳島県青年連合会	徳島県教育委員会 社会教育課	山本 信也	青柳智子 曲 揚
教員	24	国際交流サービス協会	島根	中国	島根県国際交流青年友会	島根県総務部総務課	窪 美 容	児玉啓子 付田好子
青年指導者	24	ユースワーカー開発協会	福井	中部	福井県青少年団体連絡協議会	福井県県民生活 部青少年婦人課	福山 敦夫	若林ひろみ 田中久子

## 4. 昭和63年度青年招へい事業受け入れ実績一覧

受入時期	国名	分野名	人数	実施協力団体	実施道府県
5月15日～6月14日 1陣 208名	フィリピン	学生A(理科系)	24	日本経済青年協議会	滋賀
	〃	学生B(文科系)	25	青少年育成国民会議	鳥取
	〃	教員	19	日本国際生活体験協会	石川
	シンガポール	公務員Ⅰ	24	国際交流サービス協会	広島
	〃	青年指導者	23	中央青少年団体連絡協議会	北海道
	〃	教員	25	国際交流サービス協会	鹿児島
	〃	学生	20	日本国際生活体験協会	岡山
	タイ	学生A(科学系)	28	青年海外協力協会	山口
〃	学生B(農学系)	20	全国農村青少年教育振興会	京都	
6月19日～7月19日 2陣 137名	アセアン混成	公務員Ⅰ	30	青少年育成国民会議	九州
	ブルネイ	教員・学生	20	中央青少年団体連絡協議会	山梨
	インドネシア	公務員	20	勤労厚生協会	愛知
	〃	青年指導者	22	中央青少年団体連絡協議会	熊本
	マレーシア	学生	25	世界青少年交流協会	富山
〃	勤労青年	20	日本経済青年協議会	大分	
6月26日～7月26日 3陣 92名	フィリピン	青年指導者	26	中央青少年団体連絡協議会	佐賀
	〃	農村青年	20	青年海外協力協会	山形
	タイ	青年指導者A	23	ユースワーカー能力開発協会	福島
	〃	青年指導者B(芸術関係)	23	世界青少年交流協会	北海道
7月10日～8月9日 4陣 99名	韓国	教員A(小学校教師)	25	中央青少年団体連絡協議会	岩手
	〃	教員B(中学校教師)	25	青少年育成国民会議	和歌山
	〃	教員C(高等学校教師)	24	国際交流サービス協会	長崎
	〃	学生(文科系)	25	世界青少年交流協会	岐阜
8月21日～9月20日 5陣 149名	アセアン混成	公務員Ⅱ	31	青少年育成国民会議	兵庫
	ブルネイ	公務員	20	国際交流サービス協会	神奈川
	インドネシア	学生	28	世界青少年交流協会	福岡
	〃	農村青年	25	全国農村青少年教育振興会	青森
	マレーシア	公務員	25	国際交流サービス協会	栃木
	〃	農村青年	20	青年海外協力協会	秋田
9月4日～10月4日 6陣 86名	太平洋諸国Ⅰ	フィジー、公務員	11	青少年育成国民会議	静岡
	〃Ⅱ	PNG、教員	20	国際交流サービス協会	茨城
	〃Ⅲ	PNG、青年指導者	10	日本経済青年協議会	高知
	〃Ⅳ	混成、教員	21	中央青少年団体連絡協議会	沖縄
	〃Ⅴ	混成、公務員	24	世界青少年交流協会	千葉
9月25日～10月25日 7陣 93名	シンガポール	公務員Ⅱ	24	世界青少年交流協会	三重
	〃	勤労青年	23	ユースワーカー能力開発協会	宮崎
	タイ	勤労青年	23	勤労厚生協会	奈良
	〃	農村青年	23	全国農村青少年教育振興会	愛媛
10月16日～11月15日 8陣 121名	インドネシア	教員	23	世界青少年交流協会	大阪
	〃	勤労青年	22	勤労厚生協会	群馬
	マレーシア	教員	25	日本国際生活体験協会	新潟
	〃	青年指導者	25	中央青少年団体連絡協議会	静岡
	フィリピン	勤労青年	26	日本経済青年協議会	長野
11月6日～12月6日 9陣 100名	中国	総団	4	国際協力サービス・センター	香川
	〃	勤労青年(都市経済青年)	24	世界青少年交流協会	徳島
	〃	農村青年(農村経済青年)	24	中央青少年団体連絡協議会	鳥取
	〃	教員	24	国際交流サービス協会	島根
	〃	青年指導者	24	ユースワーカー能力開発協会	福井
合計	アセアン6カ国(800) 太平洋諸国(86) 中国(100) 韓国(99)			47グループ 1085名	

## 5. 青年招へい事業実施協力団体連絡先

財青少年育成国民会議 (National Assembly for Youth Development NAYD) 〒151 渋谷区代々木神園町3-1国立オリンピック記念青少年総合センター 中央青少年団体連絡協議会 (National Council of Youth Organizations in Japan) 〒160 新宿区霞ヶ丘町15日本青年館5階	TEL460-4151
財世界青少年交流協会 (The World Youth Visit Exchange Association WYVEA) 〒102 千代田区平河町2-7-3吉田ビル2階	TEL470-2271
財日本国際生活体験協会 (Japanese Association of The Experiment in International Living EIL) 〒102 千代田区麴町4-5橋ビル6階	TEL262-6301
財全国農村青少年教育振興会 (The Rural Youth Education Development Association) 〒162 新宿区新小川町4-19末ビル3階	TEL261-3451
財日本経済青年協議会 (Junior Executive Council of Japan JEC) 〒101 千代田区西神田3-2-7ランテック神田西ビル	TEL235-7461
財勤労厚生協会 (The Working Youth Welfare Association) 〒151 渋谷区代々木神園町3-1国立オリンピック記念青少年総合センター	TEL264-3054
財ユースワーカー能力開発協会 (Development Association for Youth DAY) 〒105 港区新橋1-1-11比谷ビル6階	TEL469-6421
財国際交流サービス協会 (International Hospitality and Conference Service Association IHCSA) 〒100 千代田区霞ヶ丘2-2-1外務省第一別館	TEL508-2048
財青年海外協力協会 (Japan Overseas Cooperative Association JOCA) 〒106 港区南麻布5-10-24第2佐野ビル6階	TEL580-1621
財国際協力サービス・センター (International Cooperation Service Center ICSC) 〒162 新宿区市谷本村町42経済協力センタービル別館	TEL446-3651
	TEL355-6491

---

日中青年の友情計画 (1988)

平成元年 3月31日

発行 国際協力事業団

〒163 東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル内

電話 (03) 346-5402~4

編集 財団法人国際協力サービス・センター

〒162 東京都新宿区市谷本村町42

経済協力センタービル

電話(03) 355-6491

---

無断転載を禁じます。









